

新時代のいぶき

く伊勢国からく





講話集

新時代のいぶきく伊勢国からく

第三十六回神道講演全国研修大会 伊勢大会

【表紙写真】

表 導きの神 猿田彦大神をお祀りする椿大神社
裏 鎮魂の神 天之鈿女命をお祀りする椿岸神社

第三十六回

神道講演全国研修大会

伊勢大会

とき 令和四年九月二十日～二十二日
ところ 椿 大 神 社

目 次

御挨拶

第三十六回神道講演全国研修大会 伊勢大会 会長
神道講演全国協議会 会長

(三重県 椿大神社 宮司)

山本行恭

記念講演 神社の経営指針

椿大神社 宮司

山本行恭 1

「信じる」を恐れない

營田英聖 14

祈りと感謝

安藤孝信 19

元氣

芝幸介 24

神道と葬儀

奥野就貴 30

「いのり」について

田井健治 34

世界に誇る日本のアニソン ―日本人の感性・日本語の素晴らしさ―

鈴木明子 40

神社と北前船

お竈メ　そして新しい年

奇跡の将軍　樋口季一郎・北海道を守った男

心の拠り所

御遷宮をしよう

コロナ禍の祇園祭　くまつりの本義とはく

サルと信仰

信仰のかたち

修理固成

星野克輔 45

鈴木久代 49

小野日隆 53

西角吉貴 59

伊賀昇三 64

福本翔一郎 71

中野哲彦 76

名迫俊彦 80

島岡昇平 84

日本の神様と神酒のかかわりについて

南 博 90

料理と神様

岡 田 順 95

真清田神社桃花祭について

大 野 史 久 99

日本人の心を取り戻しましょう！

― 家に御神札を祀ろう

神宮大麻はかつてお祓い大麻とよばれた

塩 崎 昇 103

新々数え年々の勧め

宮 田 修 108

国造りは恋人から

河 本 文 夫 112

神道講演全国協議会役員名簿

124

神道講演全国大会のあゆみ

126

御挨拶

第三十六回神道講演全国研修大会 伊勢大会 会長

神道講演全国協議会 会長

山本行恭

(三重県 椿大神社 宮司)

百年前のスペイン風邪によって、全世界がパンデミックに陥ったことの再来のような新型コロナウイルスの禍によって、残念ながら凡ゆる分野での大会や研修など大勢が集うことが許されぬ行動制限の中ではありましたが、神社本庁の許可を得て、令和元年七月以来の第三十六回大会を開催致しました。三年間の中座により環境も変わったことから、初心に帰って三重県での大会に全国から多くの有志が参加され、ブランクをものともせぬ心意気で開けましたこと誠に有り難いことと衷心より感謝申し上げますと共に、御派遣くださいました各神社の宮司様にも謹んで謝意を申し上げます。有り難うございました。

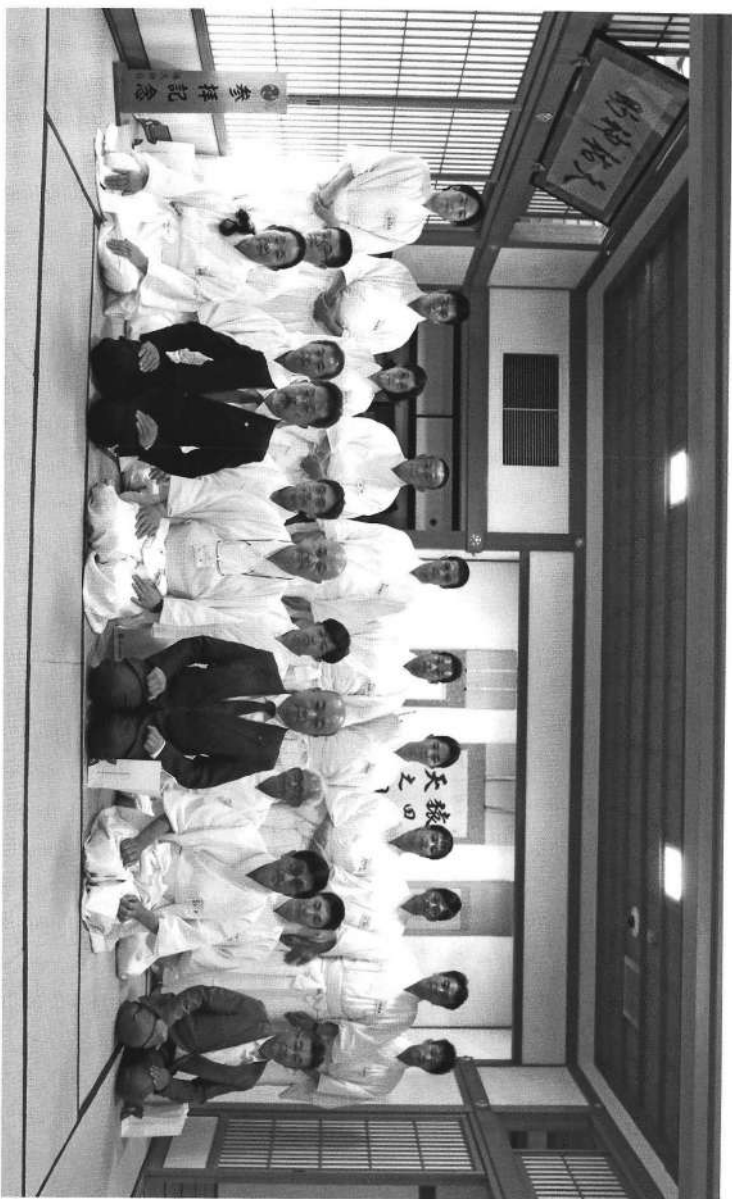
大和は国のまほろばたたなづく青がき山ごもれる大和し美し（古事記）と称えられる

大和・我が国は国土の七割を森に包まれる山紫水明豊かな国であると共に、大自然の大元である神道を言挙げせずと「葦原の瑞穂の国は神ながら言挙げせぬ国、然れども言挙げぞ我がする言幸くま幸くませと…」の如く、本来は言挙げぬ国柄であるが、「私は敢えて言挙げする…」即ち斯様な変化に充ちた世ならば敢えて言葉に出して教導すべきが、私どもの大使命であると存じます。決して難しいことを喋り伝えるのではなく、極々私どもの身の周りにある通常の出来事こそ、自然界の営みに包まれていて、その一つ一つを理解し且つ、心をこめて伝えることだと信じます。従つて次代を担う神職やお宮をお守り下さる氏子総代にも折に触れては祭典の意義や重要性和共に、現下の状況を踏まえた上での現状把握をして、今、何をすべきか、今、何を伝えるべきかを疎んじてはならない時代でもあります。

此の研修大会こそ神道における意義のある教化事業活動の一端でもあるわけで、神社の存在自体、氏子崇敬者の御協力無しでは成立することさえ困難な時代であればあるほどの必然性を覚える次第です。

幸いに令和五年は、神道講演の必要性を世に問われた故 佐古幸嬰先生の御生誕地・山

口県で全国大会をお受けいただくこととなりました。山口県神社庁長・野田神社宮司真庭宗雄様のお膝元での大会に、是非多くの神職が大きな自信と将来につなぐ夢をもって参加して頂ければ幸いに存じます。



第36回 神道講演全国研修大会 伊勢大会 令和4年9月20日 樺大神社

記念講演

神社の経営指針

椿大神社 宮司 山本 行 恭

椿大神社で青年経営者研修塾「椿自彊塾」を三年ぶりに開催しました。これは故・松下幸之助氏がこれからの日本・世界の政治経済の隆昌を導く優秀な若者を育成するべく、私財七十数億円を投じて昭和五十五年に開設された「松下政経塾」を手本として、平成十五年に椿大神社で開設いたしました。「松下政経塾」の初代塾長上甲晃先生と松下幸之助氏のご親族をお招きして経営に関するご講演をいただきました。

椿大神社では毎年必ず、一年間のテーマとなる「今年の一字」を定めております。本年は「経」です。経済・経営の経です。

南北を結ぶ縦線が「経線」、東西を結ぶ横線が「緯線」。それらを併せて経緯いきさつとなります。

椿大神社は、猿田彦大神という神様をお祀りさせていただいております。

我々が生きていく上で、未知の世界に踏み込むこともあります。時に立ち止まり、後ろを振り返ることもあるかもしれませんが、決して後戻りをしてはなりません。まさに太陽が東から登って西に傾くように、前へ進み続けなければならないわけです。この世に生を受け生かされている以上、何事も精一杯取り組まなければならない、これが猿田彦大神の教えであり、大神様はそれを助けてお導きくださいます。

令和四年は みずのえとら ごおう どせい 壬寅五黄土星中宮年です。

十干と十二支は樹木で例えるならば幹と枝です。境内には注連縄を張った檜の巨木が数多くあります。「この木は立派だね」と沢山の方にいわれますが、枝を見ていつている人はいません。誰しも木の幹を見て、これは立派な木だ、と判断するのです。

幹となる十干とは甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の順で巡り、今年 みずのえ は壬（じん）です。責任の任、妊娠の妊のつくりです。

これは次の年に現れるものを孕んだ状態であり、責任を持ってこれを養い育てていかなければならないというおしえです。即ち今年は来年に向けた準備期間に当たります。

今年の干支は「寅」です。演出の演のつくりです。上手に演出し、相手のスキルを伸ばす年です。

去年の丑（ウシ）がゆっくりと進むのに対し、寅（トラ）は一日に千里行って帰るほどに早く進みます。丑の年はゆっくり慎重に物事を行う年です。慎重に紡ぎ紐に仕上げていきます。慌てて引く張ると糸がもつれて針の穴を通りません。ですからウシのようにゆっくりと力強く物事を推し進めていかなければなりません。

そして今年、丑に代わり紡いだ紐を勢いよくのばしていくというのが寅の役割です。この十干十二支の要素が複雑に合わさり、その年の巡りが決まります。

「経」

昨今の世間の状態をみておりますと、心無い言動やそこに起因する事件などが多く起こっております。

我々は人間として筋を通さなければなりません、この「筋を通す」という意味で選んだ今年の一字が「経」です。

人間は皆それぞれ様々な立場や環境で一生懸命に生活しておりますが、コロナ禍により、

飲食業をはじめとする様々な営業活動が中止を余儀なくされました。

この負債を取り戻すべく、あらゆる手段を以て利益をあげよう、儲けようと皆奔走しておりますが、この時、決して人の道に外れた行いをしてはなりません。

困難な状況に陥った際には、その状況を打破するために筋道を立てて行動すること、その上で人間としてあるべき筋を通すこと。これがコロナ禍で我々が学んだことです。

また「経」の次に営をつけると経営となります。

経営というのは単にお金儲けのことだけではありません。この目標を達成するためにどうしたらいいか、あらゆる手段を考慮し、それらを一つにまとめ、指標を作るのが経営です。

稲盛和夫氏のお話ですが、初めて稲盛氏が配属された松風工業ではストライキが度々起こり、赤字続きでした。そんななか稲盛氏は自分にできることはなにかと考え、研究に没頭することを心に決め、一念発起して研究に打ち込みました。すると素晴らしい実験結果が出るようになり、赤字がそのあと黒字になったということです。これが稲盛氏の数々の功績の始まりで、京セラやKDDIやANAの業績回復に大きく貢献されました。

現在企業での離職率が非常に高くなっています。企業に三年間務めるなかで、離職するのは三割程度となっており、これは非常に高い水準です。

昨今「ゆるふわ企業」という言葉を耳にします。

自分たちが務めている会社は伸びていくんだろうか。日々の業務に意味があるんだろうか。という考えを持つ方が増えており、特に昭和五十年から五十五年生まれの方々に多く、離職率も高くなっています。

与えられている仕事があるのに関わらず、そこに注力せず、自分の仕事は面白くない・良くない・飽きたという考えに至ります。

人間の脳は何かを「嫌だ」と感じると機能は遠ざかり、「やればできる」「やってよう」と前向きに考えれば、積極的に物事に取り組める仕組みがあります。

九月に埼玉県富士見市で小学校の女性教諭が、給食のカレーに漂白剤を投入した事件がありました。その動機は、去年まで受け持った担任を外されたからということでした。そこで彼女の心に澱みが生じ、閉鎖的な考えに至ってしまいました。幸いにして子供たちは

口にせず、健康被害はなかったとのことで安堵しましたが、子供たちに頑張れ、大きくなれ、立派な人になれと教え導き、成長を見守るのが務めであるはずの教職としてあつてはならないことです。

渡部昇一氏という上智大学の名誉教授を務められた方がいらつしやいました。

渡部氏は一番人間にとって尊いものは時間だとおっしゃられました。

我々は皆二十四時間という時間を平等に与えていただいています。睡眠時間もありませんが、若い人は七、八時間寝るとしても、歳をとるとそんなに寝るだけの体力がなくて、私は五時間も寝たら目がさめてしまいます。だったら睡眠時間を引いた十九時間。この時間をどう使うかです。与えられた時間の中でどのようにやりくりするかが経営です。自分自身が必要なことをコントロールすることが最も大事です。

豊臣秀吉があるときに岸壁に築城をするため部下を集めました。

石積み職人をねぎらい、何をやっているのか尋ねたところ、ある者は「石を積んでおります」またある者は「立派な石をつんで、立派に作っていききたいとおもっております」ま

たある者は「立派な城をつくる。そして積んでいつてここに入る人のために喜んで頂けるものを作りたい」と答えたそうです。

石積みをするという同じ作業であっても、嫌々行う者、何も考えずにただ行う者、立派に作りたいと思う者、三者三様の意見があります。

先ほどの女性教諭は次の担任になるという、自分自身に光が向けられなかったことが動機でした。自分自身を優先するばかりで本当の意味で「子供たちを立派な人間に育てたい」という気持ちを見失ってしまっていたのです。

我々神職は神に仕える身として自分自身をお清めいたします。そのあとに御奉仕をさせていただきます。

そして神職が神社での奉仕で最初に行うことが掃除です。氏子さんをはじめ、全国各地からお越しただく方々に、気持ちよくご参拝していただくために、真心こめて清掃奉仕をいたします。

清掃ののちに様々な奉仕にあたります。これが我々の経営方法で当然の業務ですが、「当たり前」ほど難しいことはありません。

人に迷惑をかけない。余分に食べない。横柄にふるまってはいけない。これらは「当たり前」です。

しかし経営者となると多少悪いこととしてもいいかな。ちよつとくらい上乘せしてもいいかな、などと自分の欲が出るようになってしまいがちです。これはもはや経営ではありません。

我々は全員が掃除をするだけでなく、月に二回は滝に入つて身を清めます。

何十年と歳を重ねるうちに、邪な考えを見たり聞いたりすることがあります。時にその考えに染まってしまうこともあります。染まってしまった心は取り出して洗うことはできません。自分自身が、ちよつと身体が汚れているな、邪なことをしたな、意地の悪いことをしたな、中傷したなと自覚したとき、禊をするんです。夜に潔斎をして白衣を着て、氣持ちも心も、先祖にお返しします。清らかな身体で翌日からの新しい日常を過ごすことが出来ます。

松下幸之助氏は和歌山に生まれまして八人兄弟の末っ子でありましたが、お父さんが亡

くなられ、さらに兄さん姉さんたちもみんな体が弱く、ほとんど肺炎で亡くなってしまいました。

家族を残して单身大阪に出稼ぎに行かなければなりませんでした。小学校四年で中退し、大阪に单身丁稚奉公に。丁稚奉公に出た先でいじめに遭い、まだ幼い幸之助さんは母親のいない寂しさもあってよく泣いていたそうです。でもめげずに懸命に働いたところ、その経営者から「よくやってるね」と言ってお給金五錢をもらうんです。

当時の人たちはひと月働いても一錢しかもらえないなか、その五倍もらいました。みたこともないような大金を手にも、和歌山に帰ってお母さんに渡したそうです。この経験によってお金というものの価値観を覚えたといっています。

その後彼は二十三歳で松下電器の前身を創業しました。九十四歳になるまでの七十年で七兆円の企業に育てました。

松下氏は人付き合いの上での大切に行っている心得がありました。掃除のできる人との付き合いです。風が吹けば枝葉が落ちる。毎日毎日掃除することによって、心が洗われます。そのきれいな心が良き縁を生みます。

当神社でも掃除を大切にしており、参拝される方々が自分の家を掃除してもらったかのように「きれいにしてくれてありがとうございます」と言葉をかけて下さいます。さらに丁寧に掃除をすれば「足跡をつけるのも恐れ多い」とも言っていただけです。このように真心を以て掃除や奉仕に取り組めば、相手の氣持ちをも変えられるのです。

神社には老若男女様々な方がみえます。その方々の中に万が一、邪な心を持った方がいたとしても、神社が綺麗にしてあったらそのような方には近寄り難く感じます。汚いものは染まりやすく、反対に美しいものを汚したり傷つけたりできない。これが人間の性です。ですから掃除のできる人と付き合ひましょう。

「おはようございます」「ようこそお参り下さいました」「氣を付けてお帰り下さいませ」「足元の悪い中ようこそ」「おめでとうございます」

参道をすれ違つたびに何度でも足や手を止めて参拝者の方々に声を掛けます。相手に言われる前に「おはようございます」とこちらから挨拶をするのです。

芦原高穂さんのご長男も椿大神社で四年奉仕してくれていました。彼は入り口から本殿まで長い参道を毎日掃除しました。

そこで彼はある発見をしました。

「掃除っていうのはこんなにありがたいんですね。掃除をしていると、ご参拝の方々からありがとうございます。神様をお支えいただいているんですね。と明るく声をかけてくださいます。その度参拝者の方々の明るい心が見え、神様にお仕えするありがたさを感じます。」と言っていました。

挨拶が出来ない人もいます。参拝者の方々におはようございますと言うと、その子供が「お父さん知り合い？友達？」と尋ねます。

今の子供たちにとって知らない人とは挨拶を交わさないというのが当たり前になっていくのです。

挨拶の大切さを学校では教えていないのかも知れません。ですから我々が、挨拶を実践することで大切さを教えていかなければいけません。

椿大神社では、松下氏より昭和五十年三月に鈴松庵というお茶室を寄贈していただきました。松下氏は二十年間の間に十五の公共の場所や神社仏閣に寄贈され、二つは解体され

てしまっていますから、現存は十三のお茶室・お茶席です。

全国各地に様々な神社があるなかで、当神社に思いをよせていただいたことに、先代宮司をはじめ全職員が心から感謝しました。

第一回椿塾を開催した際、松下氏の御子息をお招きし、ご講演をいただきました。御子息はアメリカにしばらく赴任しておられました。その際、父・幸之助氏の「周りの人々は自分より優れている。成功者だと勘違いしてはいけない。共存共栄を大切にしろ」という言葉を実践したところ、無事に大きな目標を達成できたというお話を聞きました。

また、どんな立場であっても、一職員として現場で働くことを実践されたといえます。つまり現場という原点を忘れないことです。永遠に原点は原点であり、それを伸ばしていくのか、付け加えるのか。どのような経営を行うにしても原点に根差していかなければなりません。

私は世の中の仕組みが万事、経営にあると考え、今年は「経」という字をご紹介します。

それぞれのお社で奉仕されるなかで、限りある時間をどのように有効活用し、最大限の結果を出せるかが重要であり、その経営指針を定めることが、私たちに与えられた役割です。

今年の神道講演全国研修大会には二十二名の神職の方々にご参加をいただきました。

今回互いに講話を聴き、意見を交わしながら切磋琢磨して、また心一つにして研修に望まれたことかと思えます。

この成果をそれぞれのお社で大いに発揮され、経営にお励みいただきしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

「信じる」を恐れない

營田英聖

私には、小学一年と三年の息子が二人いるんですが、その子供たちとの何気ない会話で、ふと「子供はなんでも疑いなく信じるなあ」そして親である自分は「それは嘘だろ」と否定することが多いことに氣付き反省したのです。

子供が、どんなに嘘のような事でも信じることができるのは、元々信じることを備えて生まれてきて、疑うことは生まれてから覚えるからだと思うのです。

▼折角、生まれた時から信じる心を強く持ち合わせている子供たちに、現代では信じることよりも疑うことの重要性を説いているが、果たしてそれでいいのだろうか。ほんの一握りの悪しきまがいもののせいで、数多くの善きことが疑われ信じてもらえない世の中になっちゃっては、悲しすぎるだけでなく本末転倒ではなからうか。

▼孔子の言葉「信無くんば立たず」を借りるとするならば、強い信念とそれを心底信じる

力が無ければ、何事も成すことができないと思う。

神仏ご先祖様を信じるからこそ、恥じない正しい人生を歩もうとするし、妻を夫を子供たちを信じるからこそ一緒に暮らしたいと思うし、社長を上司を信じるからこそ指示に従い目指す存在とするし、社員を信じるからこそやる気が湧いて業績が上がるのではなからうか。そこに、もし一片の疑いでもあったならその関係性は一変に崩れてしまうのではないかと。

鎌倉幕府の基本法典「御成敗式目」の第一条に

「神は人の敬により威を増し、人は神の徳により運を添う」とあります。

いかなる神様も人々の崇敬をうけてこそ、そのご威光を輝かすのであり、御神威を高めるのは人の敬う力である。その人が人としての運、人としての生命を与えられるのは、神様の徳によってであるという意味です。

また神様を敬う気持ちが大きければ大きいほど、神様から受ける御利益も大きいとも言えるでしょう。

神様の力は、万人に千差万別なく降りそそがれるものであり、そんな尊いお力をお恵み

を百受けることができるのも、零になつてしまふのも受け手である人間次第だと思うのです。我々人間が心底神様を信じることができたなら、必ずお力を存分にいただけて、良きお導きがあると思うのです。

▼と、偉そうに今話している私も、この「信じる」という言葉を、参拝者の前で使うことに抵抗があつたのです。それは、様々な世間の宗教に対する、疑いに対して「信じる」という言葉を、神主が強く言うことによって不信感を抱かれるのではないか、という恐れがあつたからです。自分自身が「信じる」ことを言挙げすべき代表格である神主でありながら、世論に一番影響されて臆してしまつていたのです。つまり参拝者の皆様を「信じる」ことが出来ていなかったのです。

▼伊邪那岐命・伊邪那美命の問答ではないが、世の中が日に疑うことを千強いるならば、私達神主は信じることを日に千五百教えていきたい

▼神主として信じることの大切さを言挙げしつつ、まがいものの信仰にならぬよう日々精進し、ご崇敬ご参拝の皆様が信仰によつて導かれるよう努めていきたい。皆様も不安の絶

えない現状ではあるが、下を向き暗く塞ぎ込み疑うのではなく、信じる力によって上を向き前進し明るく笑顔に過ごしていただきたい。

インディアンの教えにこのような言葉があります。

- ・批判ばかり受けて育った子は非難ばかりします
- ・敵意に満ちたなかで育った子は誰とでも戦います
- ・ひやかしを受けて育った子にはにかみ屋になります
- ・ねたみを受けて育った子はいつも悪いことをしているような気持ちになります
- ・心が寛大な人のなかで育った子はがまん強くなります
- ・励ましを受けて育った子は自信を持ちます
- ・ほめられるなかで育った子はいつも感謝することを知ります
- ・公明正大ななかで育った子は正義心を持ちます
- ・思いやりのあるなかで育った子は信仰心を持ちます
- ・人に認めてもらえるなかで育った子は自分を大事にします

・仲間の愛のなかで育った子は世界に愛をみつけます

世の中の教えは「信じる」ことは「恐い」だと思います。

信頼して、裏切られるのが怖い

信用して、騙されるのが怖い

しかし、これはあくまで騙す可能性のあるものに対しての感情であって、騙そうという意識のないものに対してはまったく意味のない行為です。つまり人間を陥れる存在でない神様に対しては「信じる」ことに対して恐れる必要がなく、心底信じればいいのです。

自分が嫌われること、不審に思われることに対して、恐れていたのです。神主でありながら好感のために言挙げすべきことを、恥ずかしながら敢えて使わず逃げていたのです。まさに自分本位な考えだったのです。

私は、精神的な病で半年ほど休ませていただいたときに今までを見つめ直すことで、その逃げていることがどんなに情けないことであり、罪深いことであるかを思い知らされたのです。

(三重県 椿大神社 権禰宣)

祈りと感謝

安 藤 孝 信

普段、私たちは感謝するときに、有り難い・有り難うという言葉を発すると思います。この言葉は、字の如く「有ることが難しい」という意味で、滅多にないということです。命の尊さに対して感動をした時の言葉であり、それがいつの間にか感謝する際に用いられるようになったと云われております。ですから、有り難うと感謝の意を表すとき、同時にこれはめったにない尊いことだと自分自身の心に与えているのです。特に意識せずに口に出している有り難うの感謝は大変意義深い言葉だと思います。

この「有り難い」の言葉の反対は「当たり前」です。

日常生活を送る上で、多くのものが当たり前の存在になってしまいがちです。私の場合、毎朝目を覚ますと家族がいます。家族に挨拶をして一緒に朝ご飯を食べ、ご神前とご霊前

に行つてきますと手を合わせることから当たり前の一日のルーティーンがはじまります。皆さんにもそれぞれのルーティーンがあると思います。毎朝、目が覚めることは当たり前のことだと思いがちですが、朝になつても目が覚めず、そのまま亡くなる人も少なからずいらつしやいます。だからといって、毎朝目が覚めることに対して有り難いと感謝をする人はほとんどいないと思います。

何不自由なく生活できる現代において、便利に、自由に生活できていることを当たり前のことと錯覚してしまいます。食卓に並んだ料理は、顔も知らない誰かが肥料を与え生産し、出荷されます。出荷されれば誰かが運び、スーパーに陳列され、やっと調理されたものを口にできます。食材の一つ一つには多くの方がかわっています。皆さんも食事をする際、いただきます・ごちそうさまと手を合わせ命の糧を頂いていることだと思います。今回の台風のように天候不順・災害などの非常時で、はじめて、命、食の有り難さを悟るのだと思います。いただきます・ごちそうさまも、ただただ習慣で手を合わせず、心を込めた感謝の祈りが大切だと思います。

感謝すること、当たり前と思うことに関しては日常生活の習慣による部分が非常に大きいと思います。

まもなくコロナ禍になり三年が経とうとしています。今では、マスク着用が当たり前となっていました。流行語にもなった三密。外出自粛、リモートワーク等が当たり前となった日常生活です。ちょうど三年前のこの時期は日本でラグビーワールドカップが行われた年でもあります。ワンフオーオール・オールフオーワンと友人と肩を組み応援していた平穩で当たり前の日常が有り難い日々であったと思います。コロナ禍で大きく様変わりしてしまいました。全世界で、六百五十万人を超える尊い命が失われました。いま、こうしてお参りができ、祈り・感謝ができることは有り難く、幸せなことだと思います。

私たち人間をはじめ、この世の生きとし生けるもの全ては、太陽・空気・大地といううな大自然の恵みのおかげによって生かされて生きているのです。大自然の恵みの恩をおかげさま・有り難うと感謝する心が大切だと思います。特に私たち日本人は、大自然の恵み、森羅万象を神様のお力・お恵みとして祈り・感謝してきました。神社はその代表です。皆さんが主食とするお米は、春に豊作を祈り、初夏に田植えをし、秋の収穫で感謝をします。その都度その都度お祭りをし、祈りと感謝を捧げています。祈る時も、感謝する時も真心を込めて手を合わせます。

昨今の日本では、無宗教、宗教離れが進んでいるといわれていますが、日本人の多く

は、正月に神社に初詣をし、お盆にはお寺でご先祖さまのお墓参りをします。キリストの誕生をお祝いするクリスマスには、お子さん、恋人にプレゼントを贈ると思います。このことから色んな宗教の行事に参加されていることがわかります。信仰する宗教に捉われず手を合わせる民族が日本人だと思っています。キリスト教は神と人々を愛せよとの教えがあります。仏教は慈悲の心を持てとの教えがあり、儒教は仁の心を持てと説いております。神道には神様に日々生かされていることを感謝する神恩感謝という祈りがあります。それぞれの宗教・教義は異なっておりますが、その根本には相通じる他人を愛する、他人を慈しむ祈りと感謝があると思います。

この、祈りと感謝は、私たちの人生においても大きく関わっております。子どもが産まれたら健やかな成長を祈り、そして誕生の感謝を込めお宮参りをします。三歳五歳七歳を迎えれば七五三に。高校、大学を受験する時には、合格祈願を。厄年には厄祓いを受けます。人生の節目節目にはいつも以上にお祈りをされと思っています。

祈りには、世の為、人の為とする利他の精神での祈り、そして、利己的な自分自身のための祈りの二種類があると思います。私も皆さんも世の為、人の為に働いております。祈りも感謝も同様に世の為、人の為に祈ってみてください。

祈ること、そして感謝をすることへの御導きとして当椿大神社の猿田彦大神様がおられます。地祇神としてこの地球上に生きとし生けるものの平安と幸福をお導きいただく「みちびきの祖神様」です。

生かされていること、平穏な人生を過ごせることは大神様のお力、お導きであります。世界では、戦争、紛争などが未だに勃発しています。このような情勢を見ると日本の平和は当たり前であり、有り難いことだと実感します。しかしながら、古来より、日本人が重んじてきた祈りと感謝は徐々に失われつつあると思います。

我が国の言語である日本語は、あいいうおで始まりますよね。始まりに一番大切な愛の言葉がある素晴らしい国です。この時代にこの国に生まれ、そして生きていることの喜びを素直に感謝できるおかげさま・ありがとうの心を大切にし、お互いが協力し合い生きてゆけば、家族を、他人を愛せられる素敵な世の中になると思います。

どんなささいなことに對しても感謝の心をもつて有り難うと言える習慣を築き、当たり前というゆがんだ認識を有り難うと言ひ合う、そんな日々を送っていただければ、皆さんの人生というギフトがどれだけでも美しくなるように大神様はお力・お導きを大いに授けてくださいます。

元氣

芝 幸 介

本日は早朝よりようこそ椿大神社にご参拝くださいました。朝拝に合わせたのお祓いに続きまして、皆様の御祈祷ご奉仕申し上げますが、その前に少しご挨拶をさせていただきます。

本日は、皆さんが毎日を元氣に過ごしていただくために、誰でも始められる簡単な技についてお話しをさせていただきます。

毎日元氣に過ごすことが理想ではございますが、私たち人間というのは、生身の体でございまして、なかなかそうはいきません。例えば仕事や勉強をロボットのように毎日同じように集中して、同じ効率、同じ量をこなせるかというと、それは非常に難しいと思います。氣が乗る時もあれば、乗らない時もあります。元氣に頑張れる時もあれば、力が出ない時もあります。精神的にも肉体的にも毎日浮き沈みがありますので、調子がいいとき

も悪いときもあります。つまり、心も身体も一定ではなく、日々変化をしております。

また、私たちは毎日の社会生活を送る中で、良いものも悪いものも含めて、色々なものを見たり、聞いたり、言葉を発したり、触れたり、心の中に感じたりと、五感を通して、或いは、行為、行いによって、知らず知らずのうちに本来の自分ではなく、いつの間にか自分自身に曇りがかった状態になってしまいます。清らかなままにいるのはなかなか難しいものでございます。神道ではこれを穢れと呼んでいます。穢れと言っても、きたないとか、よごれているわけではございません。氣持ちの「氣」が「枯れる」と書いて氣枯れと表すこともできます。氣が枯れて清々しい状態ではない、この状態が続くことによって体調に変調をきたして、病氣になったり、仕事でミスをしたり、人間関係でトラブルが起こったりする一つの原因になると考えております。

そして、このけがれを除去するために、節目節目の祓い清めを行って、自分自身のくもりを磨き、元の清々しい心と体に戻ろうという事を大切にしております。皆様のうちに、この鎮守の森の中、御神前でお祓いやご祈祷を受けることも一つ、或いは自宅や会社の敷地を祓い清めることによって、一旦すべてを祓い清めてリセットして、ふたたびゼロから力強く心新たにスタートしていこうという事でございます。

けがれは氣が枯れると書くことができますが、私たちは体調が悪くなると病氣という状態になります。病氣の漢字も氣が病むと書きますし、体調が戻って健やかな状態を元氣といいます。これも氣が元に戻ると書きます。言葉遊びではございませんが、祓い清めをすれば元氣になれるという、お祓いの作用があたかも前提にあるような漢字の組み合わせだなど私は感じております。

実は、この祓い清めというのは、日常の些細なところから、心もち一つで始めることができるのではないかとも思っております。

先ほどの朝拝のなかで、鎮魂という、いわゆる沈黙の時間を少し設けております。鎮魂は漢字では「鎮める」に「魂」と書きますが、神さまの御前で静かに姿勢を正し、魂を鎮めて心を落ち着かせて、氣を整えるための時間というふうに私自身は捉えております。

鎮魂については、この拝殿の隣にございます金滝明神の滝において禊、滝行を行っております。禊は心身を祓い清める一つの方法でございますが、禊を行う際には、必ず鎮魂の作法をセットで行なうことになっており、鎮魂は切っても切り離せない大切な作法となっております。一口に鎮魂と言っても、たましずめ、振り魂と言って、魂を鎮めるだけでなく、奮い起こすための様々な動作・作法がございますが、その中でも特に大切な呼吸法、

深呼吸について触れたいと思います。

鎮魂の際の深呼吸の方法については、まず姿勢を整えて、鼻から四秒間しっかり吸い込みます。そして四秒間お腹にとどめます。そして八秒間でお腹の中から全てを吐きだします。これを数回繰り返し返すわけですが、吸い込む時にはこの世界にある森羅万象すべてを取り込むような気持ちで吸い込みます。息を吐くときには体の中にある全ての悪いものを含めて一切を出しきるような気持ちで吐き出します。悪いものを全部出しきって、体内の空気が完全に入れ替わるわけですから、ある意味、自分自身が新たに生まれ変わるという事に通じるものだと思います、なのでこれはまさに祓い清めであると私は思っております。それで、私自身はこの深呼吸を毎日の朝拝の際、鎮魂の時にいつも実践して内なる祓い清めとして続けております。

実は、この深呼吸というのは科学的にも体に良い効果が期待できると言われておりまして、リラックス効果があるというのは何となく体感できるところではございますが、それ以外にも、お医者さんから聞いたことがあるのですが、体の構造として、鼻の奥というのは脳から毛細血管が通っている場所で、深呼吸で新鮮な空気を取り込むことによって、その毛細血管が冷やされて体温の上昇を抑えてくれるそうで、コロナ禍でマスク生活が続く

中、体温の上昇を抑え、熱中症予防にも効果が期待できるそうなんです。深呼吸の仕方について、鎮魂の呼吸法と似ておりまして、まず、姿勢を正して五秒間で鼻から吸い込んで、五秒間で吐ききるというくらいのリズムが、速すぎず遅すぎず、ちょうどいいそうなんです。これを何セットか繰り返すと良いという事でございます。

マスクを着けていると、どうしても呼吸が浅くなつて、それによつて体調不良にも繋がりますと言われておりますので、深呼吸することから熱中症予防をはじめ、健康を維持するのと同時に、深呼吸することから祓い清めが、始められることも意識してみたいかがでしょうか。

当神社の中心の神様は猿田彦大神でございます。導きの神さまでございますが、さまざまな御神徳があると言われております。その一つに氣を養ってくださる神様として、氣神とも呼ばれております。当社の御鎮座伝記という書には「吾は時に応じ、機に従い化生出現す」と書かれており、いかなる時でも色々な姿に変わって現れるという神さまであるが故に、「氣」神と呼ばれております。天地万物の元氣を守る神とされておりますが、実は読み方が、「きしん」ともう一つ読み方がありまして、氣神と書いて「いきのかみ」とも呼ばれていたと伝えられております。いき、というと呼吸ですよね、それと読み方がたま

たまかもしれません。同じです。息・呼吸から祓い清めて氣を養うわけでございますので、何か通じる物があるのかもしれません。

皆様方におかれましては、氣神・いきのかみ 猿田彦大神様の御神徳のもと、この鎮守の森の中で、新鮮な空氣をしつかりと取り込んでいただいて、体内を祓い清め、氣を元に戻して、日々元氣に力強くお過ごしいただきますようお願い申し上げます。

(三重県 椿大神社 権宮司)

神道と葬儀

奥野就貴

日本人は初宮詣や七五三など人生儀礼を大事にする民族です。その中でも最後の人生儀礼である葬儀について考えていきたいと思います。

先ず葬儀の歴史について、葬儀は縄文時代にはすでに行われており、葬儀の形としては屈葬という人の体を屈ませる土葬の葬儀です。体を屈ませている理由には諸説あり、一説には死者の靈魂が浮遊しないように動きにくい体勢をとらせたという説があり、これを裏付ける要因として石を抱いていたり、縛られていた遺体が多かったことから死者の靈魂が浮遊しないようにという説が有力です。また、一部の上流階級では伸葬という体を屈ませずに伸ばして埋葬する葬儀もあり、一般の民衆には伸葬が許されていなかったこともわかります。弥生時代になると伸葬が広まり、庶民の間にも伸葬が増えていきます。伸葬が増えた理由には死者が生き返らないことや体を屈ませることに手間がかかるため行なわれな

なくなつたと考えられています。またこのころから稲作文化の定着によって定住するようになり、墓地が作られるようになります。次に古墳時代ではその名の通り古墳が全国的に作られるようになります。古墳は支配階級の豪族が権力を示すためにより大きく作つたとされており、その多くは豪族一人のために作られました。また銅鏡や太刀などの副葬品も多数の物が一緒に埋葬されました。このころの庶民の埋葬方式には特に変化はなかったようです。飛鳥時代になると仏教が伝来したことによって初めて火葬が行なわれるようになります。ただ一般の庶民には広まってはならず、僧侶や天皇など一部でしか行なわれてなかったようです。鎌倉時代になると仏教が広く普及し、火葬が一般的に行われるようになります。また鎌倉仏教が広まったことにより仏教式の本格的な葬儀が一般的に行われるようになります。室町時代にはお寺にお墓を設けるようになりお寺で追善供養を受けたいという人々により寺院墓地が広まていきます。戦国時代では武士を中心に仏教の思想が強く浸透していき、仏教式の葬儀を行なう者が多かつたようです。また、祖先崇拜、祖先に対する祭祀が盛んに行なわれるようになりました。江戸時代になると葬儀が細かく定められるようになります。戦国時代に勢力を拡大していたキリスト教の蔓延を恐れた江戸幕府は、日本人全員に何れかのお寺に登録しなければならない寺請制度を設けました。これはキリ

スト教への弾圧と隠れキリシタンを制限することが目的でしたが、この寺請制度では檀家毎に村民の名前や年齢など個人情報の詳細に記した人別帳が作られたことによって当時の世界では最大規模の人口調査が可能となりました。また、殆どの人が仏教式の葬儀を行なうことになりました。明治以降では火葬禁止令が出され火葬が行なわれなくなりましたが、土葬の為の土地が足りなくなったり、衛生面において火葬にすることが有用であるとされ直ちに火葬が義務化されます。また、神社関係者における葬儀に対して神仏分離の影響もあり、仏教で行うべきではないとされ、神道式の葬儀である神葬祭が行われるようになっていきました。このように神道における葬儀は寺請制度によって行なわれなくなり、明治政府になってから漸く再開されました。また、時代の変化に伴って新たに神葬祭を定め直す必要がありました。この時に神葬祭は一般にも行われるようになりました。

次に神葬祭について、先ず古事記、日本書紀に出てくるアメノワカヒコの葬儀が挙げられます。アメノワカヒコが亡くなった後、喪屋を建ててアメノワカヒコを安置し、食事や奏楽を供え、これを八日の間行なったとあり、これは古事記や日本書紀が編纂された奈良時代における神道で行なわれていた葬儀の形を記したものだと思われます。また、アメノワカヒコを弔いに來たアヂシキタカヒコネノカミはアメノワカヒコに似ていた為、アメノ

ワカヒコの父や母がアヂシキタカヒコノカミを見てアメノワカヒコが生き返ったのだと喜ぶ様子があり、この時、アヂシキタカヒコネノカミは死者と間違われたことに大層怒り、喪屋を壊してしまいます。これは死に触れることがケガレであることを記していると思われます。このように神道において死というものがケガレであるとされ、そのケガレが他人に移らないように他人との接触を絶つ期間を忌中としました。この忌中の期間の長さは死者との関係によつて変わり、最大で五十日とされています。そして五十日経つと五十日祭を行ないます。五十日祭は死者が祖霊神となり、家や子孫を守る為に祖霊舎に合祀される祭であるとされています。この五十日祭を終える迄が神葬祭であるといえます。現代では神葬祭は世間一般に広まりました。しかし、葬式の後に行う五十日祭を一部の神社や寺院では行なわないことがあります。葬儀としては五十日祭なども含めて葬儀であると思います。日本人は人生儀礼を大事にする為、その人生儀礼の最後である葬儀に対してより真摯に対応することが大事ではないかと私は思います。

(大阪府 住吉大社 権禰宜)

「いのり」について

田井健治

みなさん、こんにちは。今日は「いのり」について、もうちょっと正確に言えば、「いのる」ということについて、皆さんと考えていこうと思っています。

それでは先ずは言葉を分解して、ひとつひとつ考えていきます。この「いのり」ですが神社やお寺に行った時によく、お参りして祈ってきた、ということがあると思うのですけれど、この「いのり」という言葉は、「い」という語と、「のる」という二つの語が組み合わさって出来ている言葉なのです。そしてそれぞれの意味から「いのる」ということがどういうことなのか、ということを見ていくことが今日の目的です。

「い」は取敢えず置いておきましょう。一文字だけの語です。それで「のる」ですね。これは想像しやすいと思います。漢字で書くと言言の「宣」という字であったり、告白の「告」という字を当てて「のる」と読んでいるのですけれど、言ってみればこれは、「言葉

に出す」ことなのですね。つまり「い」で「言葉に出す」ことが「いのり」という事なのです。

ではこの「い」とは何なのか。「い」というのは漢字で書くと、「斎」という字が当てられます。斉藤さんの「斉」ですね。文という字を書いて、その又のところから縦線を二本引いて月のような形にする文字です。そしてこれの難しい書き方の字ですね、月の部分の横棒が示になる形の字のことです。「斎」これは清浄（しょうじょう・せいじょう）とか、清らかな、といった意味の語で、「いみ」という言い方をすることもあります。「いみ」を「斎」とは別の漢字で表すと、己に心で「忌」と書きます。これは「タブー」の意味でよく使われる字かなと思います。先ほどの話で「い・斎」のことを清浄な（しょうじょうな・せいじょうな）とか、清らかなとか説明しましたが、それとタブーは全く違うものじゃないかと感じますよね。でもこれは本質をみていった時にみえてくるものがあります。つまり何故「い・忌」、タブーするののかという事なのです。これは、清浄になる為に、清浄にならなくなる要素をタブーする。だから「い・忌」、忌むという事になるわけです。こゝとの意味というのはその中の本質があって成り立っている。「忌む」という表層的な避けるという意味もちろん重要ですが、その行為の先にある「清まっている」、「清らかな」

という本質的な意味が大事になってくる。そういうことを知っていた上で、「いのる」ということを考えてみようと思います。

先ほどの事を合わせてみていくと、「いのる」というのは、清浄になって【い】、言葉に出す【のる】ということなのです。

では皆さんが普段、神社にお参りする時の事を考えてみましょう。鳥居をくぐって先ずすることといえば、横に水桶がありますよね。手水舎のことですが、そこで手を洗う、また口を漱ぐ。これは神道では、専門的な表現をすると修祓というものを象徴しています。分かり易くいうと、お清めの儀式を象徴しているのです。なので、皆さんが鳥居をくぐって手水をするという事は、皆さんがこれから神さまに近づいて行く為に自分を綺麗にしよう、心も体も綺麗にしよう、という行為。それを象徴しているのですね。そしてそこから参道を歩いていき、御神前にお参りする、お願い事をする。

このように見ると「いのる」というのは、まさに神社で参拝をする、その作法そのままなのですよね。また、ここでもう一つポイントがあるのです。最初に「のる」とは、「言葉に出す」とことという話をしましたよね。皆さんが参拝をする時、御神前で手を合わせる時、又お願い事をする時、それを口に出していますか。声に出していますか。「いのり」とい

うのは、その語の意味から考えると、口に出してはじめて「いのり」になる。ですので、出来れば今後、参拝した時には「いのり」を口にすることを意識してみてください。何も高校球児が選手宣誓する時のような声で、周りに聞かせるような大きな声で口にする必要はありません。小さな声、周りが聞き取れない程の声でも、口に出して伝えるという行為、これが「いのり」になる。そういうことなのです。

ところで、こういう神さまごとというのは、現実のベクトルに合わせて考えてみると分かり易いかもしれません。例えば男性の方は経験がある方も多いかもしれませんが、女性から「好き」って言うてくれないと分からない。」と言われる。でも男性としては「態度で示しているから分かるだろ」と感じる。私自身、女性に言葉で伝えるという事をあまりしない方なので、しょっちゅうそんな事で諍いを起こしていた経験があるのですけれど、やっぱり言葉にすることはすごく大事なことですよね。だからといって、逆に言葉だけでいいかといったらそうでもなくて、そこには行動が伴っていないと、それはそれで伝わりません。つまり行動があつてこそ言葉が伝わっていく。行動だけでは足りない、言葉だけでも足りない。行動があつて言葉にする。それらが合わさって意味をなしていくのです。

最初の話に戻りますが「いのり」、つまり神社で参拝してお願い事をする時、自分を清

らかにしてお願いを口にする。これだけでは足りないのです。行動に表わすということ、言葉で伝える段階で誠心誠意を示す行為、それが伴っているかどうか。それが重要になります。皆さんが普段の生活の中で、何といたしますか、お天道さまに恥じない行為とでも言えбайいでしょうか。そういったことが出来ているかどうか。完全にやるというのは難しいと思います。でもちよつとでもそうあらうとする行為があるか、若しくはないか。そのようなことが、祈りを伝えた時、祈る言葉の力、神さまへの通じ方は絶対に変わります。

一般社会や勤め先などでも同じことが言えるのではないのでしょうか。普段、仕事に誠実に取組み、一生懸命努力している姿が見てとれる人がいる。一方で普段、仕事をサボってグダグダとしている人がいる。この両者が、ある時困難に直面し、自分に助けを求めてきた。その様な場面で皆さんならどちらの手助けをしようと思いますか。またどちらの人の言葉が、自分の胸に届きやすいと思いますか。

このように現実のベクトルで考えてみた時、その時に自分だったらどう感じるか、どう思えるかということ、それが高次元の段階でみた時、神さまと私たちの関係として捉えることができるのではないのでしょうか。

今日は、「いのり」というひとつのキーワードについてお話をしました。全体の話の八

割くくらいは忘れてもらって構わないのですが、二点だけは覚えておいて下さい。

一つ目は「い」という語、清らかになるという意味。つまり穢れた状態で御神前には近づかないようにすること。そうですね。恋人に会う時にお風呂に入らずに、髪の毛がボサボサのまま会いに行かないですね。絶対に身なりを整えますよね。そういう事です。なので「い」は清らかなということ。

そして二つ目は、御神前に近づいて「のる」ということ、きちんと言葉にして表わす。またその為に普段の生活を心掛ける。この二つの事、これが「いのり」・「いのる」ということなのです。

これから先、お参りの際には、清める、口に出すという事などを気にしながらお参りして頂くと、また何かしら変わっていくことがあるのではないか、その様に思う次第でございます。つたない話ですが以上にしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(三重県 結城神社 権欄宣)

世界に誇る日本のアニソン

— 日本人の感性・日本語の素晴らしさ —

鈴木明子

今や世界を席卷している「アニソン」ご存じでしょうか。

私は全く知りませんでした。テレビの「マツ子の知らない世界」で初めて耳にするといいアナログ人間でしたから。

さて、アニソンとは、アニメソングの略でその日本語の歌詞が、実に素晴らしいというのです。そのテレビでは、イタリア人の女性ユリ子さんという人が、日本のアニメやアニメソングが好きで好きでたまらなくて、とうとう日本に移住してしまったそうですが、彼女が熱っぽく語っていました。

そうか、日本語の素晴らしさがやつとわかったか、何と言っても日本語は、神様のお働きを示しているカミナ、神名、かな、なのだから、エヘン、と思った次第でした。

さて、日本のアニソンがどれ程凄いかというと、「超電磁マシンボルテスファイブ」と

いうアニメが一千九百七十七年、世界で熱狂的に大ヒットし、特にフィリピンでは、第二の国家とまでいわれ、フィリピン警察のトップ国家警察長官の交代式でも使用されたそうです。

そればかりでなく、そのボルテスファイブのアニソンを聞いて育った若者たちは、その歌を歌いながら革命を起こし、マルコス政権を倒す原動力としたそうです。

そのアニソンの歌詞が素晴らしい、心に刺さるということです。

ぬくもりを信じあう五人の仲間

やるぞ力の尽きるまで

地球の夜明けは、もう近い

と、勇気を与えるとともに、明るい未来を暗示させて、素晴らしい日本語だと言うのです。また、同じ一千九百七十年代に世界にヒットした『飛べ、グレンダイザー』西欧では、『コルドラック』として放映。

東西冷戦で人々は、不安と緊張の生活をしていた中で、地球の平和を守るためにグレンダイザーに乗って戦う物語は、四十年たった今でも、人気があるそうです。特に

友と誓ったこの平和

守りも堅く立ち上がれ

地球はこんなに小さい星だが

正義と愛で輝く星だ

という歌詞は、今、争いが絶えないカオスな時代に心に刺さる言葉で、フランスでは、視聴率百パーセントを超えたそうです。

米国で二十十六年にヒットした、僕のヒーローアカデミア、ピース、サインも、劣等生の主人公がヒーローをめざして成長していく物語で、身分や貧富の差が激しい米国で、どんな立場からでも逆転できるという応援歌として人々は捉え、大人気となったそうです。

彼女は、ここで日本人や日本語の素晴らしさを次のようにあげています。

1 日本人にしか作れない八十九秒のミラクル

これは、アニソン八十九秒の中に英語、イタリア語、フランス語も 入れてメロデーもオペラ風あり、ジャズ風あり、演歌ありと、世界の音楽が合わされていること

2 物語がただのファンタジーでなく、心に刺さるリアリティーがあること

3 世界を魅了する日本語の魔力

日本語は、歌いやすく、覚えやすい

日本に来ている留学生は、日本語は話せないのに、アニメソングは日本語で、めちゃくちゃ上手に歌うことからわかるそうです。

これは、一字一音でしかもすべてアイウエオと母音、開音で出来ているので、発音し易い、海外では子音で終わるので舌の使い方が、難しいのだそうです。

4 コール&レスポンスがあるのも魅力

コレスpons（受け答え）は、海外には無いそうです。

このレスポンス（合いの手）と言いましょか。これは日本人の国民性ともいえるべき協調性、共同体意識からくるものと考えられますが、歌っている時にレスポンスがあると、本当に会場が一つになって盛り上がります。

以上、イタリア人のユリ子さんが日本人の作るアニメソングやその歌詞の素晴らしさを感動的に語ってくれたのですが、ロジャー、パルパース（米国人の作家、劇作家、演出家）さんも「驚くべき日本語」という本の中で

「日本語は世界共通語にふさわしい普遍性がある」と述べられています。

私たちはもっと私達の日本語の素晴らしさを自覚し、より美しく、アニソンのように愛と勇気と希望に満ちた日本の言葉、言霊を大事にして行こうではありませんか。

(滋賀県 立木神社 権禰宜)

神社と北前船

星野克輔

先ず、神社と北前船の關係をお話する前に北前船についてお話します。北前船とは江戸時代中期から明治三十年頃まで日本海周りで大阪と蝦夷地（北海道）を寄港地で積荷を売買しながら、往来していた帆船の事を指します。また、寄港地の数は日本海側に百力所以上ありました。大阪・江戸を結んでいた菱垣廻船（ひがきかいせん）や樽廻船との大きな違いは、寄港地で安いものを仕入れて他の寄港地でそのものを高く売る買積船（かいせきせん）であったことです。大阪・北海道を一往復すると今の利益で1億円の利益になり具体的に北前船で運ばれたものは、下り荷（大阪から北海道・新潟へ）は、江戸時代には収穫できなかった米などの食料品から贅沢品の人形、上り荷（北海道から大阪方面へ）は、ニシン粕などの肥料、食料では日本の食文化の象徴でもある昆布などがあげられます。ニシン粕については、綿・菜種・藍の栽培の肥料に使われ、大阪・近畿の農業の発展に貢献しました。昆布などの食文化に於い

でも、昆布だしの文化を大阪・近畿に広めたのは北前船であり単純にものを運んでいたのではなく文化を運んでいたのです。動く総合商社と称されることから様々な方面で影響をもたらしたことが伺えます。

さて、神社と北前船の關係についてですが、身分制度があり武士が世の中を治める時代において庶民が自分の力でチャンスをつかみ莫大な富を築くことのできる北前船はまさに夢そのものでした。当時は現代と比べて、航海が発展しておらず「板子一枚 下は地獄」と言われるほど命がけであり、船が沈めば全財産を失う危険な商売でした。その為、航海安全などを神様に祈りが捧げられてきました。その上で欠かせない存在が、出発地の大阪に鎮座する住吉大社です。ご存じの通り住吉大社は住吉三神と神功皇后をお祀りする全国二千三百社の住吉神社の総本社で、航海安全の神様として崇敬を集めてきました。住吉大社には約六百の石燈籠が奉納されており、その多くは、運送船業の関係者からの奉納であります。その石燈籠には、日本各地の地名や北前船で運ばれた産物が刻まれており、住吉信仰が北前船を通じて全国各地に広がっていたことが伺えます。また、それは、住吉大社に限らず寄港地それぞれでも似たようなことが言えます。各寄港地の神社にも、石燈籠・船絵馬・鳥居・狛犬などの寄進が盛んに行われ、航海安全の祈りを捧げたのです。明治

二十年代になると、北前船は少しずつ利益を減らしていきます。電信という通信手段の開発により、各地のものの価格が共有されるようになり北前船が独占していた価格情報が、多くの商人に広まっていくのです。明治二十四年には、東京・青森間の東北本線が全通し、大量かつ安全に運ぶことのできる汽船も普及し始めるなど明治三十年代には、日露戦争の影響もあり、完全に姿を消すことになりました。それを境に神社への寄進なども当然行われることもなくなり、石燈籠・船絵馬・鳥居・狛犬などが各神社に残り、今ではそれが日本遺産になり大切に受け継がれています。

先ほど北前船は、文化も運んだと申し上げましたが、私の出身の北海道でも北前船に関わる祭典が行われています。姥神うばかみだいじんぐう大神宮の渡御祭です。当神社は、旧渡島国一ノ宮で北海道最古の神社ともいわれています。この渡御祭には、山車がありまして、十三基ある山車の中で唯一の船型の山車、松寶丸まつほうまるがあります。この山車は、弘化二年（一八四五）に大阪で建造されたことが、体胴内に記されています。船名については、松前藩主第十一代昌広によって命名されました。その扁額に掲げられている詠歌に住吉大社との関わりが伺えます。「もろ人も 神の恵みを うけて程 まうてと申され 住吉の宮 従三位国福」とあり、この従三位国福じゅうさんみくにとみとは住吉神主第七十三代の津守国福のことです。北前船の終着点で

ある江差にもいまだに引き継がれている北前船と神社の関係性が祭典を通じて地域の文化として、残っています。

この機に北前船についてお話ししようと考えたのは、令和元年に新たに七つの自治体が日本遺産に認定され、北前船の功績が再注目されているからです。また一方では、現在は北前船で栄えた寄港地の多くは、人口減少などの影響により経済が衰弱し、過疎化が進んでいます。今残る伝統や文化も人がいなくなれば、受け継いでいくことすら困難です。神社の発展は、地域の発展に直結する部分があると考えています。その為にも、北前船に限りませんが、歴史や文化からつながりを見つけ、様々な形で神社また神道・地域が発展していくことに繋がればと考えています。

(大阪府 住吉大社 権禰宜)

お竈メ そして新しい年

鈴木久代

本日はお竈メのことを、お話ししたいと思います。一年のうちで一番忙しい日々を迎える十二月、全国の神社は、新しい年の神さまをお迎えするにあたって色々と準備をします。こちらの神社では、十二月二十八日から三日間、氏子さんや新しくこちらに住まわれた方々が、新しいお神符を受けに来られます。

お若い方もいれば、年を重ねられた方々もおります。「一年間お世話になりました。おかげさまで神さまに守っていただきました。お竈メとお神符を一組お願いします。」おばあちゃんと一緒に来られたお孫子さんが、「おばあちゃんおかまじめってなあに？」と聞いていました。「おかまじめは、おかまじめだよ、神主さんに聞いてごらんよ。」お孫子さんには、このように答えました。「家族みんなが、元気で暮らすことができるように、また一生懸命お勉強を頑張れるように神さまにお願いするお神符のことなんだよ。」お孫子

さんには答えたものの私もどうしてお竈メと言うのだろうか、はつきりと答えが見つかりません。私が聞いていたことは、一年三百六十五日かまどで火を炊き食事をつくり命をつないでくれたかまどの火を、大晦日に一度火を消してかまどを閉める。そして新しく正月に改めて火を起こしてかまどを開けるところからお竈メという呼ばれ方が来ていると聞いています。一年の締めくくりと、けじめをつけて暮らすことなのではないかと私は思うのです。はつきりとは分かりませんが、意味がはつきりしないままお竈メと言う言葉が、ずっと昔から伝えられていて、神さまに守られながら去年と同じことが繰り返される、なんと幸せなことだろう。そして一つ一つ歳を重ねて、健康を祈り、又、災いがあつた時は、「災い転じて福となす。」と神さまに感謝し日々を暮らしてゆくことなのだろうと思うのです。良い神さまをお持ちいただくためのお神符作りは、とても大変です。氏神さまは、昔のように版木で刷って一体一体刷り上げます。気象も自然ですから、紙を折って刷り上げるまで清らかな心と清らかな身体を保つと言うことの大変さは、とても尊いことだと思います。次に諸々の神さまで。竹ぐしに、神さまを添えるのですが左右対称をしつかり見ながら一本一本添えていきます。添えながら心で念じるのです。新しい年が、良い年でありますように、おまつりされるそれぞれのご家庭が良い年を迎えられますようにと神さまに、お

願います。

皇大神宮大麻、産土神社そしてお竈メ一组、昔から引き継がれているそれぞれのお神符をお渡しします。緊張の三日間ではありますがこんな楽しい会話もあります。「神主さん、お神符買うから歳を買ってくれよ。」一緒に並んでいる氏子さんたちが、笑い出して、みんなが、笑顔で、お竈メを受けてゆかれます。

歳はたくさん買ってあげたいけれど、こればかりは、一年に一歳だけしか買えませんね。そのかわりとびきり良いお神符を、お授けしましょう若返りのお神符です。

全国には、その土地によってそれぞれ違いはありますが、古いお神符を、預かって、新しいお神符をお受けいただくという神社としてのお役目があります。例えば、「今年は、つらかったよ、家内がなくなつて、さみしい年だった。まだ神さまを、まつれないから一年預かって下さいよ。」悲しみの底にあるご主人に、励ましの言葉を、おかけしながら、「こんなかわいい人形を飾って下さい。」と、干支の人形を、そつと手のひらに添えますと、たちまちご主人のお顔が、ほほえみます。来年は、きっと良い神さまを、おまつりされることを願いつつ「来年は、うさぎ年。悲しみをピョンと乗り越えて下さいね。」と声をかけます。

お竈メと一緒に笑顔を添えさせて頂きます。

今年は、神宮大麻全国頒布百五十周年の節目にあたります。神さまに、お守りいただき、神さまに感謝しつつ長きにわたり続いてきたことは日本の誇りだと思います。そして新しいお神符を、おまつりして、更に次へと続けてゆくことが、大切だと思うのです。

歳は神さまに買っていただき、神さまから、新しい年を授かりましょう。それではどうぞ良い年をお迎え下さい。

(東京都 北野天満社 権禰宜)

奇跡の將軍

樋口季一郎・北海道を守った男

小野 日 隆

今年も八月十五日が巡ってきます。八月は六日、九日の広島、長崎への原爆投下、十五日の終戦記念日と、毎年八月は、新聞やテレビなどで先の大戦の事が何かと取りざたされます。

今朝は終戦時に北海道、南樺太、千島列島を作戦地域とした、第五方面軍司令官を務めていた樋口季一郎陸軍中将という軍人のお話をしたいと思います。なお、この樋口中将は、後ほどお話しますが、八月十五日にも大きく関わる人物でもあります。

皆様は樋口季一郎という軍人の名前をご存知でしょうか。その名前は、あまり知られていませんが、先の大戦中、まさに奇跡ともいべき三つの出来事を成し遂げた軍人なのです。

三つの奇跡とは一体何でしょうか。一つは、あの「命のビザ」で有名な杉崎千畝よりも

二年前にユダヤ人の救済を実現させたこと。二つ目は、キスカ島の日本軍守備隊五千二百名を隠密裏に撤退させたこと。そして三つ目は、日ソ中立条約を一方的に破棄し、北方領土に侵攻してきたソ連軍を打ち破り北海道を守ったことです。

樋口季一郎は明治二十一年八月二十日、淡路島の阿万村^{あま}というところに生まれました。樋口中将は軍人を目指します。陸軍幼年学校、士官学校、大学校と優秀な成績で進み、陸軍大学校卒業後は参謀本部付となつて、ロシア通として活躍します。

因みに、幼年学校では石原莞爾が陸軍大学では阿南惟幾が同級生です。陸軍中将に、北の大本営ともいわれた第五方面軍司令官として終戦を迎え、八十四歳で亡くなります。

さて、三つの奇跡、先ずユダヤ人難民救済の話です。第二次世界大戦中、ナチスドイツからの迫害を逃れて多くのユダヤ人難民が発生しました。その難民に関しては、当時リトアニアの領事館に外交官として赴任していた杉原千畝が六千人のユダヤ人を救った「命のビザ」が有名ですが、このビザ発給よりも二年前、樋口季一郎はユダヤ人難民を救つてゐるのです。

樋口季一郎は昭和十二年、満州のハルビン特務機関長に就任します。当時すでにヨーロツパ、ドイツではナチスが台頭しておりユダヤ人への迫害が進められていました。就任の翌

年、昭和十三年のことです。ソ満国境の町オトポールに難民十八名が立ち往生していました。難民たちは上海へ向かおうとしますが満州政府はドイツとの関係悪化を恐れて、なかなか手続きを進めません。時期は厳寒の三月です。このままでは難民は凍死してしまいます。この事を見かねた樋口中将は、渋る満州国に働きかけ入国を認めさせ、彼らに食料や衣類、寒さをしのぐ燃料、医療の手配をし、彼らの脱出ルートを切り開きました。杉原千畝の「命のビザ」の話よりも、さらに二年前のことです。ユダヤ難民の上海までの脱出ルートは「ヒグチルート」と呼ばれ、一説では二万人とも言われるユダヤ人を救ったともいわれています。

二番目は、世界戦史上の奇跡と呼ばれ、米軍をして「パーフェクトゲーム」と言わしめたキスカ撤退作戦を成功させたことです。

樋口中将は、大東亜戦争勃発の翌年、昭和十七年、北の大本営と言われた北部軍司令官として札幌に赴任します。日本軍が戦略上の拠点としてアリューシャン列島のアッツ島、キスカ島の占領を十七年六月八日に成功させますが、十八年になると米軍の反攻が激しくなります。樋口司令官の必死の増援要請も受け入れられず二千六百人のアッツ島守備隊は大本営に見捨てられた格好で玉碎してしまいます。

さらに、米軍は圧倒的な戦力でキスカ島を包囲します。玉砕と言う、悲しみと怒りの中でキスカ島をアッツ島の二の舞にはさせない。中將は海軍を動かし玉砕を目前にしたキスカ島守備隊五千二百名を隠密裏に撤退させるという「世界戦史上の奇跡」ともいわれるキスカ撤退作戦を成功させました。昭和十八年七月二十九日の事でした。アッツ島の玉砕は、この丁度二か月前の五月二十九日でした。二十九日は山崎大佐以下最後のアッツ島守備隊員の月命日です。この作戦の成功には、きつとアッツ島玉砕勇士の英魂のご加護があったに違いありません。

三番目の奇跡は、占守島の戦いです。占守島という島の名前を聞いてピンと来る人は少ないと思いますが、この占守島での日本軍の奮闘が無ければ、北海道は今の北方領土のようにならずに不法占拠された可能性があったのです。

占守島は、千島列島の北端、カムチャッカ半島から十キロメートルの位置にあります。大東亜戦争は、昭和二十年、戦局は日本にとっていよいよ厳しい状況となり、ついに八月十五日にポツダム宣言受諾の玉音放送をします。ところが、日ソ中立条約を一方的に破棄したソ連は、停戦した後の十八日未明、日本最北端の領土占守島に突如侵攻して来ました。停戦そして降伏と言う「どさくさ」の中で、その混乱に乗じてあわよくば北海道まで狙お

うという火事場泥棒的な不法行為です。北方警護に当たる第五方面軍の樋口季一郎司令官は、大本營の指示は、十八日の午後四時をもつて戦闘行為を全て停止せよということでしたが、理不尽な侵略作戦に対して、「断乎反撃に転じ、上陸群を粉碎せよ」と下命します。樋口司令官の命令一下守備隊は力戦奮闘、上陸したソ連軍を打ち破り二十三日の停戦に至り、北海道侵攻を諦めさせました。自衛戦闘に踏み切った樋口司令官の決断が北海道を護ったのです。

戦後、樋口季一郎は北海道小樽の郊外に夫人と友のひっそり暮らしていましたが、ソ連から「戦犯」に指名されます。ソ連通で知られ、東条英機や石原莞爾と関係があり、何より北海道侵攻という野望を打ち砕いた樋口司令官はソ連からすれば、スターリンからすれば憎悪の対象に違いありません。

しかし、樋口司令官への召喚は有りませんでした。その裏にはアメリカ国内において世界ユダヤ協会の樋口救済のロビー活動が行われたからだそうです。そうです、あのソ満国境オトポールで立ち往生していたユダヤ人を始め、樋口ルートと言われるユダヤ人救済の道筋を作ったことがその理由に違いないと思います。樋口は思いがけず「恩返し」を受けただけです。

今、私達は、ウクライナに対するロシアの侵略行為を目の当たりにしています。中国船舶の尖閣周辺への領海侵犯が繰り返されています。みんなはGHQの押しつけ憲法を「平和憲法」と有難がっていますが、その前文には「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われわれの安全と生存を保持しよう」と決意した」とあります。いかがですか、皆さん。尖閣をうろつく中国やウクライナを侵略するロシアが「平和を愛する諸国」ですか。そんな国を「信頼して、われわれの安全と生存を保持」出来ますか。憲法九条があれば日本の平和は保たれるという平和ボケの時代はとくに終わっています。このままでは、北海道も沖縄もロシアや中国に取られてしまいます。国を守るとはどういうことか。今我々はそのことをしっかり考えなければなりません。

私達は、いま改めて樋口季一郎という軍人を知るべきだと思います。戦闘行為の中止という命令下で、自衛戦闘に踏み切り北海道を守った樋口季一郎中将の決断に改めて国民は感謝すべきではないでしょうか。

八月十五日は「戦没者を追悼し平和を祈念する日」とされています。今月は、今の繁栄の礎となられた御英霊に感謝すると同時に、樋口季一郎という将軍に思いを馳せてはいかがでしょうか。

(大分県 八坂社 宮司)

心の抛り所

西 角 吉 貴

みなさま、本日はこの住吉大社までようこそのお参りでございます。

本日の境内案内を担当させていただきます。

住吉大社の西角です。

本日の境内案内に際して、皆様に二つ持つて帰って欲しいモノがございます。

まず初めに五体力石守り、次に神社が皆様にとつてどのような場所であるべきか。

以上の二つを私の体験をふまえてお話いたします。

まず初めに五体力石守についてお話いたします。

この五体力石守は「五所御前」という場所で拾うことができます。

「五所御前」とは漢数字の五、場所の「所」、御礼の「御」、前後の「前」という字であります。

この五所御前は第十四代仲哀天皇がお后様であります。神功皇后が住吉大神の御霊をお

鎮めになられる場所を探しておられる際に、場所を定めた所になります。この五所御前は玉垣に囲まれております、玉垣とは石の囲いのことでございますが、その囲いの中にはたくさん的小石がございます、その小石には「五」、「大」、「力」それぞれの文字が書かれております。

そのそれぞれの文字の書かれた合計三つの石を袋に入れていただいたものが、五体力石守となります。

このお守りは心願成就のお守りとして持つて帰っていただきますがただ持つて帰って頂いてそれで終わりではありません。このお守りには「倍返し」というものがございます

この倍返しはお願いが叶った後、自身で三つの石を見つけ、そこに「五・大・力」のそれぞれ三つの文字を書き、最初に見つけた石に加えて合計六つの石にしてお返ししていただきます。

神様へのお礼であると同時に、自分の願いが叶った石をまた別の人が拾うことで、その人にとっての幸せの種になるということです。

私はこの五体力石で好きなどころがこの「倍返し」であります。

見ず知らずの人の幸せのために石を返すということが、なんというか日本人のやさし

さや美德というものを感じることができる気がするからですね。

この倍返しである素敵な出会いがありました。

ある日に五所御前にてあるおばあちゃんが話をしてきました。その人は何か急いでいるようで、私の顔を見るなり「五体力ってまだやってますか？」と尋ねてきました。こうした質問は多くてなぜなら四時になると五所御前に通じる門が閉まってしまうからです。

その時はまだ昼過ぎの余裕のある時間だったので、余裕がありました。なので「そんなに焦らなくても」と思い、その場所に一緒に案内をしたのです。しかしそのおばあちゃんの石の返し方があまりに丁寧だったのが気になりました。よく見る光景では石をぽんとほったり、人によつては投げている人も見たことがあります。そのおばあちゃんは石を一つ返すのに真に迫った感じといえますか、あまりにも気持ちが悪くもっていたんですね。

気になって尋ねてみました。「お願いが叶ったんですね」と、するとそのおばあちゃんは「十年前のお願いが叶ったんです」と答えました。

十年前のお願いが叶ったこともすごいですが、そのお願いを十年間覚えておくこともその願いが叶ったら石を返すこともきちんと覚えているのってすごいことだと思います

か？

そのおばあちゃんと話して気付きました。最初の「五体力ってまだやってますか？」という質問は門が開いているかどうかを聞いてきたのではなく、五体力守そのものがまだやっているのかどうかを尋ねたものだったのです。

私がここに務めた時から五体力はありました。ですので、あつて当然だと思っていました。が、よく考えてみれば、十年前のモノが同じ場所で同じ形で同じ方法で残っているという事。これってすごいことだと思いませんか？

私の実体験ですが久しぶりに実家に帰ったとき、風景が何もかも変わっていました。昔よく遊んだ公園、母に連れて行ってもらったショッピングモールもすべて形を変えて残っていませんでした。

おばあちゃんの立場になつて考えてみましょう。十年前にお願いをし、願いが叶い感謝の思い出神社に来て、その場所がなかったらどれだけ悲しい思いをするでしょうか。

この十年間その願いが何であれ、五体力があるから大丈夫だとそれを拠り所にして頑張ってきたのだとしたらその場がなくなっていたら、とてつもなく悲しく思うはずです。昔の思い出が心を癒し、日々の生活を送るための心の拠り所になっていたのでしょうか。

この例以外にもお神輿や獅子舞、安産祈願、結婚式、様々な思い出が神社にはあります。その思い出を心の拠り所になっている人だっています。

我々神職は、信仰も大切ですが、その思い出の場所を守り続けることも役目なのだと気付きました。

神社とはつまり昔の文化、風景を残し、思い出を思い出させる場所であります。

その場所への思い出が、愛情になり遂には信仰へとつながっていくのではないのでしょうか。

さて私のお話は以上です。これから実際に五体力を拾っていただきますがぜひとも楽しんでください。石を持って帰って願いが叶い、ここに戻ってきたときにぜひ今日のことを思い出してください。あの人あんな話してたとか、そういえばあの一緒に石拾った人元気にしているかなとか。小さな思い出で構いません。その小さな思い出が大きな出来事につながるのだってありますから。私も皆さんが帰ってきてても大丈夫なようにこの場所を守っていききたいと思います。

(大阪府 住吉大社 権禰宜)

御遷宮をしよう

伊 賀 昇 三

皆様、こんにちは、『御遷宮をしよう』という演題にてお話をさせていただこうと存じます。鹿児島神宮の伊賀と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、御遷宮と聞きますとご当地伊勢では二十一年に一度神宮での式年遷宮がございますが、そのお話はご専門の先生方が多々ございますので、本日、私がここに参りましたのは、この度（神徳）神社様にては新しく宮司様がご就任され、お歳もお若く前途洋々、心機一転ということで神社の修理を始めたい、また会館の改修、駐車場などの境内整備もお考えになられていると云うことで、そこでいったいどこから始めたら良いのか、どの様に進めたらいいのか、というような事を神徳神社の責任役員総代の皆様方へお話を頂きたいと云うことで、本日こちらへお伺いさせて頂いただいた訳でございます。皆様方の参考になるかどうか解りませんが、私がこれまで四つつの神社で携わらせていただきました御遷宮や

記念事業で気付きましたことをお話をさせていただくことと致します。お手元にプリントをご用意させていただきましたのでご覧ください。

プリントをざっとご覧いただきますとお解りになるかと思いますが、これからお話致します事は、御遷宮の意義とか御神徳とか神様のなことや精神論的な内容ではございません。御遷宮遂行の方法をお話させていただきます。つきましては役員総代の皆様方には神社側の立場の方として内々に御遷宮の手の内をお話させていただきますので、ご理解の程お願い申し上げます。

プリントの1、どのようなお宮造り、境内づくりをしたいか？

当然のことながら神社でございますので、先ずは（1）本殿そして拝殿等ご社殿の修理、お神様がご鎮座されておられますところから始められた方がよろしいかと存じます。屋根の葺き替え、檜皮葺、柿葺き、銅板葺き等々、檜皮葺の材料であります檜皮は現在全国で年間二五〇〇㎡分くらいしか調達できない状況で、軒先三軒程のお社でありますとお寺も含め一年で大凡七〇社くらいは葺き替えしか対応できない数量で、又、葺き替える技能をもった専門の宮大工の技術は今や世界遺産に登録されるに至っておりますが、その職人も

全国で二〇〇名程と限られております。文化財の指定事業を受けるのであればそれなりの時間も必要となりますので早め早めの準備が必要となってきますが、文化財と指定されているご社殿であるならばできるかぎり指定事業として修理されることをお勧め申し上げます。

次に（２）境内整備、社務所や会館の改修や改築、駐車場の整備となります。この（２）につきましては（１）と絡めて御本殿修理の付帯事業として進められると後に説明致します募金活動が運びやすくなります。また、雨漏や白アリが有ります場合急いで優先して修理をして下さい。

ここまではこの度の御遷宮の出発点でありますので、この段階では、皆様大きな夢、大きな希望を抱きましょう。あんな物が欲しい、こんな事がしたい、この次期が一番楽しい時ではなからうかと思うのです、大いに皆様で相談して悔いの残らないように大いに楽しんで下さい。大切なことは、最初に予算在りきで考えると夢が小さくつまらないものになってしまう。せっかくですから、先ずは夢を無限大に広げてみてはいかがでしょうか。夢は無料でございますから。

次に2、ではどんなふうに、どこから始めたらいいのでしょうか？ということなのですが、事業の始めから順を追って考えていくだけでは話がなかなか先に進みません、現実味が一向に帯びて来ない訳です。そこで発想を転換して後ろを先に決めてしまえます。いつまでに完成したいかを決めることです。これには何かの理由付けがあつた方が説明しやすく物事が運び安くなります。つきなみですが『神徳神社御鎮座千年記念 令和の大修理』みたいな何か縁起がある日が設定できるとよろしいかと思えます。

御遷宮の到達日と大見出しが出来上がれば半分は出来たようなものです。時間の都合上、あとはプリントに書いてありますこと、組織を作ったり、見積を取ったり、趣意書募金活動を行ったりと、一つ一つ手順を追って進めていただければ竣工、御遷座までたどり着くものと思います。詳細な事柄のご質問などがありましたら改めてご相談に応じさせていただきます。

責任役員総代の皆様、御遷宮を始め記念事業の遂行は、宮司一人で成し得るものでは有

りません。神社は地域の皆様あつてこそ成り立つのでございます。皆様のご協力が有つてこそ神社の復興が成し得るのでございます。現代社会において、皆様方が神社はいらないと放り投げてしまうことは簡単なことだと思います。しかしながら、皆様方が幼き頃より集つてこられた此の場所、皆様方のお父様、お爺さま、その又先の更にその先の御先祖様から代々受け継がれて来たこの場所、この神社、皆様方だけのものでは無いと思います。御先祖様が後世の子孫の幸せを願つて受け継ぎ受け継ぎ守つて来られたから現在に続いているのだと思います。そして現在、私たちの世代がこの神社をお預かりしている番であるという事ではないでしょうか。今、壊れかけているこの神社を後世に子孫に残し伝えていくことが大切な私たちの使命なのではないかと思うのでございます。どうぞこの趣旨をご理解いただきまして、役員総代の皆様方には各々ご町内やお知り合いの皆様にご御遷宮記念事業の特に募財活動の趣旨をご理解戴きまして、皆様の温かいご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

ここまででは、責任役員様総代にお話しする内容ですが、私もようやく年が明けますと来年還暦になります。神職としてはまだまだ若僧の年齢ですが、四十年近くこの世界でお勤

めさせていただきました。ほんとうにお若い方々も年々増えて参りましたので、少しばかりここからは神青会等神職の方々へということでお話したいのですが、神職講習会などに行きますと、「神職の仕事で何が一番大切だと思いますか」という問いかけを耳にします。今日これからそのような問いかけをしようと思っていた方がございましたら誠に恐縮いたしますが、大方その答えは「先ず神事」祭典が大切、又は、神社は掃除が一番とおっしゃられる方が多い様な気がします。当然間違えではないのですが、しかしながら私は、そのことは神職として大前提であり当たりまえの事であると思うのです。よって講義で声高に言うことでは無い様な気がします。昨今そう言わないといけない状況であるからこそおっしゃているのだらうとは思いますが。私はそのことは踏まえた上で、「神職として自分は何ができるか」、そこを考えなくてはいけないのではないかと思うのです。作法をより極めることも良いことです。雅楽ですばらしい音を奏でる、これもすごいことです。講演のエキスパートになる、これも素晴らしいです。このように自分はプラスα何ができるか、何で貢献できるか、どの様な事で神様に喜んでもらうか、その事を常に問い、実践する事が大切なのではないかと思うのです。皆さん各々神様に喜んでもらう道具は色々有ろうかと思いますが、行く先は同じ方向であろうかと思うのです、その中で私は皆様に御遷宮を

経験してみて下さいと申し上げたいのです。そこにはこのプリントに有りますように祭儀や祭式作法は勿論、調度品や衣紋などの有職故実、雅楽、神社建築、神道教化活動、地域活動、募財活動、直会、イベントなどの神賑わい行事、記念品御守り、会計、行政書士、等々ありとあらゆる事柄が必要となつてきます。そしてそれらを実践しながら学んで行く。そして神社が新しくなる、神様はきつと喜んでくれているはずだと思ふのです。もちろん地域の皆様も笑顔が一杯のはずです。「先ず神事」という言葉は、神様の近くでお仕えするという距離や時間的な事だけでは無く、「何処にいても、先ず神様の事を思い、神様の本当の喜びとは何か」その事を問て行動することが、所謂『先ず神事』^{カムゴト}であるのではなからうかと私は考えています。神職になったからには、特に宮司になられたからには、色々な事を学び色々なことに挑んでみる、一生に一度は、『御遷宮をしよう』、御遷宮を恐れずにやってみようではありませんか。

(鹿児島県 鹿児島神社 禰宜)

コロナ禍の祇園祭

まつりの本義とは

福本翔一郎

新型コロナの感染拡大により私たちの生活様式はこの数年で様変わりしました。働き方や社会の常識、人々の意識も大きく変化し、三密（密集・密閉・密接）を避けるよう呼びかけられ、ソーシャルディスタンスが求められた結果、人と会うことや集まる機会が減ったり無くなったりました。人が集まるイベントや地域のお祭りに至るまで、中止や規模の縮小を余儀なくされました。祇園祭もコロナ禍の影響を大きく受けました。しかしながら本年は、できる限りのかたちで三年ぶりに山鉾巡行と神輿渡御を行うことができました。今回はコロナ禍の祇園祭と題して、今年の山鉾巡行と神輿渡御実現に至る迄のまつりの在り方を模索した年を振り返り、まつりの本義とは何か、お話をさせていただきたいと思います。

さて、新型コロナが日本で初めて拡大した令和二年、政府は東京五輪の開催延期、緊急

事態宣言を発令し、外出自粛を国民に呼びかけ大規模な行動制限がとられました。世間においてコロナは得体の知れないウイルスという認識で、多くの人が日々不安に駆られた年でありました。四月、各地でお祭りの縮小や中止が続く中、八坂神社と山鉾連合会は、祇園祭の山鉾巡行と神輿渡御の中止を発表しました。山鉾巡行と神輿渡御が共に中止になったのは戦後の昭和二十一年以来実に七十四年ぶりのことでした。戦時中の八坂神社の記録では、山鉾は空襲の標的になることを避け建てられませんでしたが、神職が各山鉾町に向いてお祓いをする神事は毎年行われており、神社では神輿が出せない状況でも七月十七日、二十四日に本殿においての祭典が行われていました。このように例年通りの祭を行うことができなくても、できる限りの祭を行った先人と、このような時だからこそ疫病退散を願う神事を行いたいという氏子・崇敬者の方々の思いを受け、神社は過去の史料や様々な由緒、先例をもとに神輿と山鉾を出さない新しい形の祇園祭を行いました。山鉾は先例に倣い神職によるお祓いの神事は執り行いました。神輿においては、祇園社記という書物に、応仁の乱によって神輿の準備が間に合わなければ櫓をもつて神事を斎行せよと明応九年に室町幕府から命令が出されている記事があり、結果神輿は間に合ったため当時は実施されませんでした。この形をとるのは祇園祭史上初の事でありました。宵宮祭にて御神

靈をお遷しした神輿を十七日に櫛に宿して神馬の背に祀り、八坂神社から離れの御旅所までお渡りする御神靈渡御祭を行いました。また巡行できない山鉦に代わり、各山鉦の代表者が櫛を捧持して御旅所に赴き参拝をしました。このように祭りの意義を再度見直し、できるやり方で祇園祭を厳粛に斎行したのであります。

翌年の令和三年、二月にコロナのワクチン接種が開始されましたが、コロナの猛威は収まることなく四月には三度目の緊急事態宣言が発令されました。このような世情を鑑み、この年も山鉦巡行と神輿渡御は中止せざるを得ませんでした。祇園祭の関係者からは感染症対策も大事だが何もしないのでは伝統技術の継承ができなくなるとの声が多くありました。そのため山鉦は十基のみ技術伝承を目的に建てられました。神輿においても令和二年は神輿庫から出しませんでしたが、この年は例年奉安する舞殿という建物まで出しました。轆を神輿に紐で括りつける技術や、安全に昇くには毎年の経験の積み重ねが欠かせないのです。この年も昨年のやり方に倣い、櫛に神々を宿し御旅所までお渡りを行いました。そして今年、政府による行動制限も大きく緩和されかつての日常を取り戻しつつあった中、山鉦連合会と保存会は次世代に文化遺産を継承すべくできるだけ本来の形で実施することになりました。八坂神社は神輿を京の都に出し御旅所に奉安することが最も重要な意

義であるため、本来は氏子地域を巡りますが、感染症対策の面から今年は神社から御旅所までの最短ルートで渡御をしました。このように今年の祇園祭は、できることから少しずつ始めようという思いのもと行い、全ての神事行事ができたわけではありませんでしたが、さまざまな困難の中、氏子の皆様や関係者一同力を合わせて賑々しく厳粛に斎行できた祭であつたと思います。

祇園祭は貞観十八年、京の都に疫病が流行したとき、勅を奉じて当時の国の数六十六本の矛を立て神泉苑に神輿を送り、国家の安寧と厄災消除を願ったことに由来し、実に千百五十年の歴史がありますが、時代とともに祭のかたちは変化してきました。しかしその中で変わらないもの変わってはいけないものがあります。それは、疫病を鎮め、人々の無病息災を祈る神事を行うこととあります。祇園祭は応仁の乱や先の戦争などで中断され、存続の危機に見舞われることも多々ありましたが、その度に京の人々が力を結集し復活を遂げてきました。どんな困難があっても必ず祭を継承する、この思いが祇園祭の歴史から読み取れます。コロナ禍や近年の異常気象により今まで当たり前にできていたことができなくなりました。しかしこのような状況だからこそ原点に立ち返り見直すべき時期にきているのではないでしょうか。祇園祭とは何のための祭か、その本義に向き合い、伝統

を継承することがこれからの祇園祭にとって大切なことではないかと思ひます。

(京都府 八坂神社 権欄宜)

サルと信仰

中野 哲彦

さて、皆さんのお住いの周辺でサルを見かけることはありますか。

多度町では数年前から、町中にサルが出始め最初のころは珍しく思っていました。しかし、ここ最近毎日のように出てきて、我がもの顔で町中の住宅の屋根から屋根へ飛び移り大変迷惑をしています。

神社においては、真夜中の境内はモンキーパーク状態で、多い時には五十頭ほどの大群が現れ、そこら中で叫び声がして、屋根などを走り回っています。朝、周りを見渡すと建物や、参道は至るところ糞だらけにされています。社用車は車庫がないので常に猿の手形がいつばいで、ひどいときには車の屋根に糞が乗っていて、それを知らずにそのまま出かけて恥ずかしい思いをすることもあります。

このようなサルですが、昔から日本人にとっては関わりが深く信仰もあったようです。

今では考えられませんが、縄文時代にはサルを捕って食べていたそうです。ただし、私たちがいま牛や豚の肉を食べている意味とだいぶ違ったようで、サルを食べる意味は、元気で強い相手の命またはエネルギーを頂くということだったようです。

参拝者に、サル of 被害の話をする、多度大社には神馬がいるけど「お馬さんはサルが出ても大丈夫なの」と質問されます。実は猿が横にいると馬は安心するという、馬の習性があるようです。この、猿が横にいると馬は安心するという習性から、厩猿というものがあります。

厩猿とは、悪魔祓い、疫病除けの為に馬小屋の軒下や柱に猿の頭蓋骨を飾りました。そして、簡易的な方法として、猿の絵を描いた絵馬やお札を魔除けとして貼っていました。有名なのは誰もが知っている日光東照宮の三猿です。

皆さんはこの三猿がどの建物に描かれているかご存じですか。それは神厩舎と呼ばれるいわゆる馬小屋に描かれています。まさに、厩猿であることがわかります。因みに、猿まわしも厩猿と同じで、猿は馬を守護するという考えから、厩舎の悪魔祓いの儀式として行なわれていました。それが後に大道芸に変化したものです。以来、厩猿は招福猿として縁起がいいものとされてきました。

このように、人間とサルとの繋がりは時代とともに信仰や生活に深く結びついてきたことが分かります。

猿が横にいと馬は安心すると言いましたが、多度大社では神馬舎の屋根にサルが飛び跳ねてやってくると、神馬はパニックになっているので、どこまでが本当なのかはわかりません。

三猿の話に触れましたので、三猿のことについてお話させていただきます。三猿は、古代エジプトやアンコール・ワットにも見られ、シルクロードから中国を経由して日本に伝わってきました。いわゆる「見ざる聞かざる言わざる」の教えは八世紀ごろ、天台宗系の留学僧が日本に伝えたと言われています。

この天台宗が重要で、日光東照宮は現在では神社ですが、創建時は日光山という神仏習合の地で、天台宗のお寺でした。また、天台宗のお寺といえば比叡山の延暦寺です。

比叡山をお護りする神社が日吉大社です。日吉大社はサルをお使いとする山王信仰の発祥の地です。天台宗と関係の深い神社にサルの信仰があるというのも納得できるでしょう。

現代のサルは全国で厄介者としてニュースで取り上げられることも増えてきました。では、どうしてサルが町中に出始めたのでしょうか。一つの要因として環境破壊が大きな原

因と言えるでしょう。住宅や工業団地の開発で山を削り宅地にして、居場所を奪われた動物が、町へ現れ危害を及ぼす事に繋がります。北海道の話ですが、かつて、アイヌ人はオカミを神として敬っていましたが、開拓とともに駆除してしまいました。その代わり増え続けたのがエゾシカです。今は、エゾシカの駆除に追われています。

皆さんは子供のころ「無闇に木の枝を折ってはいけないよ」と教わった事を覚えていますか。日本人は昔から万物に八百万の神様が宿られていると教えられてきましたが、今ではそういうことを教える人も減ってきたのではないのでしょうか。木を伐採し山を削り環境が変わってきたことにより、各地で大雨の被害も多く、まさに神様がお怒りになられているかのように思います。

そもそも、神道では日本の国土は伊邪那岐命、伊邪那美命が国生みによりできました。我々日本人はこの国土をお借りして生活をしているということを忘れてはいけません。一人一人が神様に日々感謝し、自然の有難さを今一度見直す必要があるのではないのでしょうか。人々がこのことに気づけば昔のように暮らせるかもしれません。

早くそういう日が来ることを願いつつも、迷惑なサルは山の奥へ立ちサルことを期待します。

信仰のかたち

名 迫 俊 彦

今日は、日々の社務で私が感じている信仰のかたちについてお話させて頂きます。

学生時代、祭式の授業中にふと、「大祭の時に御扉を開いたら、おっちゃんが出てきて、自分は神様だと言いついたら周りの人たちはどういう反応をするのだろうか。何の痕跡も残さず、始めから御扉の内側にいたとしか思えなければ、おっちゃんを信じて神様として信仰するだろうか。何を馬鹿なことを言ってるんだと神様かもしれないおっちゃんを警察に突き出さだろうか。」授業に集中もせず、そんな妄想をしておりました。このしょうも無い疑問に答えを出せないまま、ご縁があつて、松尾大社に奉職させて頂くこととなりました。

松尾大社は全国性的にお酒の神様として有名なお社でございます。松尾大社の成り立ちについて、簡単に説明させて頂きます。

松尾大社の裏手には、松尾山という山がございます。その山の中腹に大きな一つの岩が有り、それを大山咋神が宿つてらっしゃる磐座として文献にも載つて無いような大昔から地元の人々から信仰されてきました。そして、今から約一三〇〇年前に当時京都の西の辺りで力を持っていた秦氏により今の場所にご社殿が建てられ、今の形に至っています。

これが、簡単な松尾大社の成り立ちでございますが、ここまでの説明では「お酒」という言葉は一つも出てきません。では、なぜ当社が醸造祖神として崇敬されるお社になったのかと言いますと、先ほど申し上げました秦氏は渡来系の一族の方でございます。秦氏は大陸から日本に來られる時に様々な技術を持って來られました。それは機織りの技術や、或いは河川の土木工事の技術であつたのですが、中でもお酒を造る技術が特に優れておりました。今でこそ酒蔵の方がコンピューター等を駆使して温度や湿度を管理し、毎年おいしいお酒が出来ますが、昔はそういうわけにはいきません。そういった中で、秦氏のお酒は毎年とてもおいしい物が出来ていてそれは、朝廷に献上され天皇陛下が召し上がるくらい素晴らしいものであつたことから、秦氏が社殿を建てられた松尾大社に参拝に行けば、自分もお酒造りについての恩恵を受けられるのでは無いかという全国の醸造家の皆様の信仰から、松尾大社は醸造の神様であるという信仰が広まりました。

また、松尾大社の境内奥には、靈龜の滝という滝がございます。先ほど申しました松尾山の磐座に続く道の途中に水元があり、そこから枯れることのない清涼なる水が湧き、御手洗谷を流れて靈龜の滝となっています。その靈龜の滝の中腹に、天狗の顔に見える天狗岩という岩がございます。まるで天狗が御神域を見護っているかのように見える岩であります、これは昔からそのような信仰があつた訳ではございせん。とある参拝者の方が神秘的な天狗の顔の岩を夢に見たそうです。そしてたまたま松尾大社に参拝に來られた時に夢で見た天狗岩を靈龜の滝に見見したというのが、天狗岩の紀元となっています。

今では、靈龜の滝の前に天狗岩を示す看板も立てられ、廣く氏子の方に親しまれておりますが、これはごく最近新たに發現した信仰のかたちだということです。

日頃、境内を見ておりますと特に御神木とされていない木に手をかざされる方。賽銭箱前で、自作の祝詞を奏上される方。ご自身の作法で参拝される方。様々な参拝の仕方をされる方がいらつしゃいますが、皆それぞれとても清々しい顔で参拝なされます。

この様に信仰とは今も昔も関係なく、例え由緒さえ不確かであっても、廣く人々の心の拠り所になるものなのではないでしょうか。

私個人としては、神道の根源となるものは自然崇拜であり、御扉から人の形をしたおつ

ちゃんが出てきた場合、それは神様とは言い難いのではないかと思います。その考えだけが正しいとは思いませんし、そのおっちゃんに賛同し信仰する方が現れれば、それは立派な新しい信仰だと思えます。

この様に他者の信仰のかたちを尊重することも、神職として大切なことなのかなと感じております。

さて、皆さんは御扉を開け、中から神様を名乗るおっちゃんが現れたらどうしますか。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

修理固成

島岡昇平

本日は、氏子総代の皆様方に、『古事記』の神代のお話に登場する「修理固成」、「つくりかためなせ」という神様のおことばについて少しくお話申し上げ、ご一緒に考えるきっかけと致したくと存じます。

「しゅりこせい」あるいは「しゅうりこせい」と音読みで申しますと、聞きなれない言葉かと思われますかもしれませんが、訓読みで「つくりかためなせ」「つくりかためよ」「つくりかためなす」などと申しますと、ご存じの方、「ああ、あの言葉か」と思われる方も大勢いらっしゃるかと思えます。

総代の皆様のご出席になる神社関係の各種式典、神社関係者大会、総代会大会などの場で、参加者一同で唱和する「敬神生活の綱領」の第二条「世のため人のために奉仕し、神のみこともちとして世をつくり固め成すこと」の「世をつくり固め成すこと」のもととなつ

た言葉です。

「修理固成」に由来する「つくりかためなすこと」が登場するこの「敬神生活の綱領」は、昭和三十一年、神社本庁設立十周年記念大会にて宣言されました。当時、わかりやすい言葉による綱領という趣旨でつくられました。しかしながら、やはり神道界独特の言葉遣いで、一般社会になじみの薄い用語も多く、さらに時代の変化、学校教育の内容の変遷、世代交代もあり、「敬神生活の綱領」は、決して簡単な文言とはいえない」との意見、また、「神職以外にはききなじみのない言葉が多くむずかしい」という声も式典の折などにきくこともあります。

私自身もこの「敬神生活の綱領」について最初に学んだとき、第二条の「神のみこともちとして世をつくり固め成すこと」の言葉はわかったような、わからないような心持ちでした。

心にひっかかりを感じたこともあり、「つくりかためなすこと」、そしてその元の『古事記』のお言葉、「修理固成の神勅」とも称される神々のお言葉について学びたいとおもいました。

実際のところ、東京都神社庁では、「敬神生活の綱領はむずかしい。すぐにはわからない」とのような声を受け、平成十八年、「敬神生活の綱領」の趣旨を尊重した上で、文言を一

般向けのものとした「敬神崇祖の誓い」という独自の標語をつくりました。

その「敬神生活の綱領」を簡単にした「敬神崇祖の誓い」では、この「つくりかためなすこと」の言葉そのものはなくなり、「修理固成」を直接的にあらわす言葉は採用されませんでした。「つくりかためなすこと」は、わかりづらいと判断されたのでしょうか。

だいぶ遅くなりましたが、先ほどから申し上げている「修理固成」、「つくりかためなすこと」の由来がそもそもどこにあるのか確認致しましょう。

『古事記』の冒頭、はじめにあらわれた天つ神の神々から、男と女の神様で日本の祖、我々のご先祖様である伊邪那岐命、伊邪那美命お二方様に「是のただよへる国を修理固成せ」とお命じになられたお言葉が「つくりかためなせ」、原文の表記で「修理固成」です。天地のはじめ、まだ、大地もなにもかたまっておらず、ただよっていたときに、混沌を整え、地をつくり、「国」として固めなすことを神々は伊邪那岐命、伊邪那美命にお命じになられ、ここから本格的に日本神話はスタートし、国生み、国造りへと続くのです。

「是のただよへる国を修理固成せ」との言葉から世界は整えられ、国土が生まれたのです。

また、「修理固成」の読みの候補も様々で「つくりかためなせ」の他、「つくりかためなせ」「つくりおさめかためなせ」「おさめつくりかためなせ」などたくさんございますが、

基本的に今回は本居宣長先生の読みにしたが、「つくりかためなせ」とします。

この『古事記』に由来する「修理固成」の四文字は、江戸時代途中から四字熟語のような使われ方がはじまりました。特に明治以降、神社界、神道界にて「修理固成」の四文字を音読みし、四字熟語のように使われることが多くなり、「修理固成」と何度も唱える神道系の教団も生まれました。

そのように重視されたのも、この「修理固成」が神々の最初のお言葉であり、私たちのご先祖様にあたる伊邪那岐命、伊邪那美命二柱の神が賜った最初のお言葉だからです。

そして、伊邪那岐命・伊邪那美命に命じられた「是のただよへる国を修理固成せ」との神様のお言葉を、伊邪那岐命・伊邪那美命の子孫である私たちも受け継いでいるという考えから、「修理固成」を今に生きる私たち自身の使命、課題と捉える信仰が生まれました。それが「敬神生活の綱領」にも反映されています。

「修理固成」、「つくりかためなすこと」は、神代の国生み、国造りのみを指すのではなく、広く捉え、現代まで続く私たちの使命とする考えです。

「このただよへる国」とは、現代社会であり、私たちの内面でもあるとする、そのような「修理固成」の広い解釈の流れが今に継承されています。

常に社会には、「なるところ」「ならざるところ」が存在し、社会、国家、世界は「ただよへる国」であり、それをつくりかためなす使命が存在する。未完成の世界、今日の世界を明日に向けそれをよきものにする使命。問題を解決したり、未開拓の領域に前進したり、あるいは、日々のつとめにはげむことが、未完成の世界、つまり「ただよえる国」をつくりかためなすことにつながるといえます。

このような考え方を引き継いだ一つが、「敬神生活の綱領」の「世のため人のために奉仕し神のみことちとして世をつくりかためなすこと」です。

神様のみ言葉、神様のみことのりを神勅といいます。この「修理固成の神勅」は、三大神勅とされる「天壤無窮の神勅」などと比べて現代では知名度が低いといっているでしょう。「天壤無窮の神勅」「宝鏡奉斎の神勅」「斎庭稻穂の神勅」をはじめ多くの神勅があるなか、最初の神勅、神勅の元祖、おおもとにあたる神勅こそがこの「修理固成の神勅」です。

この今日のお話自体が、未整理であり、まさにつくりかためられていない、修理固成されていらない雑然としたものですが、総代の皆様が式典などで「敬神生活の綱領」を唱えられる折に、日本神話の最初、『古事記』の冒頭にでてくる神様のお言葉、みことのり、ご命令が「このただよえる国を修理固成せ」との「修理固成の神勅」であることと、その使

命を私たちが現代でも受け継いでいるとする誓いが「世をつくりかためなすこと」との文
言であることを思いおこしていただけるきっかけとなれば幸いです。

（東京都神社庁 録事）

日本の神様と神酒のかかわりについて

南 博

神社で御神酒というと、お供えする御神酒も、お下がりとして頂く御神酒も大変馴染み深いものですが、その御神酒を通して神様とは何か、御神酒によって神様のお働きが見えてくるような気がしています。

大神神社にはお酒の神様という強い信仰の一面があり、酒蔵の方々ともいろいろお話しをする機会が多いのですが、私は常々なぜ神様と御神酒おみきは関係が深いのかと興味がありました。

全国各地の神社に参拝しますと御神前には一升瓶のお供えが並んでいたり、御社殿や参道に酒樽が積み上げられています。お賽銭箱の傍らにワンカップのお酒がお供えされた光景も良く目にします。大変信仰の篤い方がお供えして置いていかれたのでしょうか、こう

いう光景を実に神社らしいと感じます。

「御神酒の上がらぬ神はなし」という言葉もありますが、古くからお酒は神社や地域で造られ、神様にお供えし、祭りの後には皆で「直会」を行い飲食を共にするという我が国独特の風習があります。このとき御神酒は神様と人々との一体感を強め、酒の「酔う」という高揚感がコミュニケーションを明るく円滑にし、御神酒は神と人、人と人を結ぶはたらきを担ってきました。

結婚式でも新郎新婦が「三三九度の盃」を御神酒で交わすことが夫婦の契りを固める儀式となっています。

日本酒はお米で醸造されており、お米は天照大御神が永く国民が食してゆくものとして瓊瓊杵尊に授けられ、古来お米には神霊が籠もっていると考えてきました。

そのお米を自然の力で発酵させて出来上ったお酒は、もつと神力が籠もり、お供えしたお酒を直会で神様の御神徳が籠もったものと皆で有難くいただき、めでたいこと、威勢のいい景気づけには御神酒と、私たちにも神社らしい馴染み深いものとなっています。

では、今度はお酒を製造する酒蔵の人々と神様や神社とも大変関係が深い繋がりがあ

ますが、これはどのようなことからなのか。

古代では口嚙み酒から、麴菌による醸造が大陸から渡来した秦氏を中心にもたらされました。やがて清酒の醸造、さらに大量生産の技術も発達しました。

鎌倉・室町時代へと、酒造りはどんどん技術が向上していきます。

江戸時代になると樽廻船などの大型船によって、神戸こうべの灘なだや伊丹の酒どころの酒が江戸や全国に流通し、大量の酒造が必要となってきました。

そこで、夏は農業に打ち込む農家の人々の中に、冬の農閑期に、酒造りのスペシャリストとして酒蔵で活躍する杜氏制度が出来上がったようです。

酒造りは、その地域で収穫された米や水、地域の風土を活かし、お米を発酵という大自
然の力によって酒を醸します。その間、繊細な工程が夜昼無く続き、また危険とも隣り合
わせで、ミスが許されない大変な緊張感の中、杜氏さんはお酒を醸造していきます。その
中で、どうしても大自然に確かに存在する人智を超えた働きに気付かされ、向き合う場面
が多いのです。

科学や技術が近代化しても、なお醸造には大自然の力、神様の力がなくては美味しい酒
は出来ないと言われます。

そういつたことで杜氏さんや酒造会社の方の神様への信仰は大変篤いものがあり、私もお話しを伺うといつも頭が下がります。

先般、とある酒造会社の会長さんからこんなお話しを伺いました。

酒を造る麹菌・酵母菌という微生物は肉眼では見えず、蔵人たちは常に五感（嗅覚・味覚・視覚・触覚・聴覚）を働かせ、この目に見えないものたちを意識しながら仕込みにあたります。経験を積み重ねるうちに、自らの技は麹菌や酵母菌を活かすために少しばかりの助けに過ぎないと気づきます。いたずらに手管を弄（ろう）することはせず、目に見えない大きな自然の流れに沿って酒が生まれてくるように謙虚な姿勢で酒を醸すようになります。こうして仕込まれた酒は風味柔らかく、気持ちと和ませる酒になります。

一つ確かに言えるのは、良い酒を造る杜氏は「神事を大切にする」。日々早朝と夕刻の神棚へのお参りは欠かさず、新酒を絞ると真つ先に神様に献上する、酒造りは太古の昔、神様への捧げ物として始まったとは知っていましたが、杜氏は今もその気持ちを持ち続けています、と。

また先日ある蔵元のブログを拝見して、加賀の霊峰・白山の神様に関連する銘のお酒を

醸造されていて今年の新酒が出来たので、この新酒を背負って白山に登頂し、無事に奥宮にお供えが出来たと。この二年間は新型コロナの影響で白山奥宮への献上が出来なかったけれど、今年はやっと神様に無事にお供えが出来て、大変喜びを噛みしめている蔵人さんの気持ちと写真を拝見し感銘を受けました。まさしく神様にお供えするという大きな目標をもつて酒造りに邁進し、出来上がった新酒は、先ず白山登頂までされて神様に献上し、それから皆さんに飲んでもらうという、白山登頂まで実践される神人一体の酒造りに大変感動しました。

まさしく、酒造りは一つの神事なのです。神様とはどういうものか。御神酒おみきと酒造りさけづくの方々の地道な活躍を通して、いまでも伝統を支える方々を心から応援したいと思い、皆さまにお話しした次第です。

ありがとうございました。

(奈良県 大神神社 権禰宜)

料理と神様

岡田 順

私にとって、神様への御供物は『料理』です。料理を作るのと同じ気持ちで、御神前にお供えするのです。野菜や果物は土を落とし、綺麗に洗った物を使います。袋に入った小魚や昆布も、そこから出して小皿にのせて置きます。整ったお供物を前にすると、気持ちですつと神様に近づくことができるのです。

でも、最近まで私はその気持ちをすっかり忘れていました。これからそのことをお話したいと思います。

私は料理人です。神主になるよりずっと前から料理を生業として歩んできました。『包丁一本あればなんとかなる』という気持ちは今でも変わりません。しかし、コロナの災禍は全てを変えてしまいました。

独立開業して六年目の三月頃です。新型コロナという疫病は猛威を振るい始めました。

お店の経営も落ち着き、開店資金として銀行より借りたお金を返す目処がやっとたつた、さあこれからという矢先のことでした。

春先、まだどこか遠くのことだったコロナの波が、「近くのコンビニ店員の発症」というニュースとともに大きく降りかかってきたのです。ちょうど歓送迎会の時期ということもあり団体様のご予約もたくさんいただいている頃だったのですが、このニュースとともに予約はひとつ、またひとつと、みるみる消えてしまいました。予約帳に並ぶ赤い横線とその先の真つ白なページ。「コロナめええ！」と私は本当に憎みました。

冷蔵庫には魚や野菜などたくさんのお食材が入っています。返済金の支払いはどうしよう。すべての目処が立ちません。

あれほど忙しかった私の世界が静止してしばらく、世に求められるまま営業自粛を決めると、私はこれまでできずにいた店の修理と改装を自分できるところから始めていきました。壊れた屋根の修繕、物の整理、庭木の剪定など。仕事に忙しく行き届いていなかったことをひとつひとつ片付けていくうちに季節は初夏へと変わりました。コロナは依然と治まる様子はありません。

次に私は奉務神社に向かいました。先代より引き継いだお宮ですが、これまで月毎の月

次祭と例祭日以外はほとんどあがることはありませんでした。一步お宮に入るとメジロやウグイスが鳴き世の中のパンデミックが嘘のように、穏やかな空気に包まれました。

いつかやろうと思い、できなかったこと。開かずの間の整理、本殿や拝殿の隙間の修理等、作業はどんどん進みました。

ふと気づくと、まわりは赤や黄色や紫色のツツジの花に囲まれていました。ただただ美しく、山が生き物に見える様でした。こんなに美しい場所だったのかと、心に響きました。すっかりお宮で過ごす時間に慣れた頃、また月次祭の日がやってきました。掃除を終え、御供物の準備をしている時、私はある思い出の中におりました。私が神職を志す頃読んでいた本の中に、お伊勢さんの神様へのお供物の写真がありました。そのお供物の美しかったこと。『お供物は料理だなあ。私もこれを作ってみたい。』すうーと吹き抜けていく風とともにその時の感動が思い出されました。

そして、これまでよりも丁寧に準備をしゆっくり時間をかけて月次祭を行いました。とても落ち着いた気持ちになりました。次に私は思いました。『ああ、誰か参って来てくれないかなあ』と。私は神社の掲示板に始めて文章を掲載しました。

「一日の月次祭は十五時より行います。どなた様でもご自由に参加いただけます。」

一日、午前中に清掃をし、午後の用事を済ませた後に祭典の準備をしていたら、一人の女性が現れました。「参加してもよろしいですか。」と聞かれ私は、「どうぞどうぞ。」と拝殿に招きました。女性はこの張り紙を見て、十五時からならば参加できるかともと思い、参られたそうです。私は嬉しくてたまりませんでした。

自分のしてきた事を神様は見えてくださり、守っていただいている。

『いつもありがとうございます』その想いを込めて、お供物をし神前に向かいました。そうして、日々感謝とともに丁寧な歩む日々が、また新たな縁を結んでゆくのです。あれほど憎いと思ったコロナは大切な事を教えてくれたのです。

(広島県 倉神社 宮司)

真清田神社桃花祭について

大野 史久

本日は真清田神社の桃花祭についてお話させていただきます。

桃の花の祭りと記します桃花祭は当社御鎮座日である三月三日、桃の節句に行われていましたが、明治時代に新暦が採用され、現在は四月三日に行っております。神社の鎮座地である一宮は松降庄青桃丘と称されておりました。桃の群生地で、付近には木曽川が流れておりました。江戸時代の文献によれば、「人々は三月三日に桃の木で身を祓い、それを川に流していたが、川が遠くなり、桃の枝を神前へ供えるだけになった」との記述があります。現在の神事でもお供えされる神饌の傍らには小さな桃の枝が添えられています。桃は神話にも登場するように邪気を祓う果物として古くからお祓いに用いられてきました。人形（ヒトガタ）に罪・穢れをうつし、桃で祓い清め川へ流す。桃花祭の意義は祓いの祭りであったことが窺われます。余談ではありますが、ヒトガタという言葉がヒナガタとい

う言葉に変化したと考えられ、本来のひな祭りは女の子のために人形を飾るお祭りではなく、お祓いのために人の身代わりになる意味があると考えられています。

さて、四月三日に桃花祭を行うと前述致しましたが、当社では四月一日から三日までを指します。一日短冊祭、二日歩射神事・試楽祭、三日流鏑馬神事・例祭（桃花祭）・神幸式を斎行いたします。

まず一日、二日の神事です。が例祭に関係のある神事です。真清田神社は古くから歌が献詠されることが多く、諸々の願い事や御神徳を讃える歌を随時献詠し神社へ納めていたようです。桃花祭においても同じで、何時の頃からか短冊を山車に差し上げると山車の人から返歌の短冊が貰えるという行事に変化していき、これが殊更に参拝者間で人気が出て、桃花祭を短冊祭と称する程となったそうです。江戸時代後期に衰退しましたが、昭和初期頃に再興し今日に至っております。現在は、毎年兼題を決めて広く募集し、その中より選ばれた複数の歌を神前にて披露されます。

選ばれた歌は嘉例に倣い東西の御車に奉納されます。

次に歩射神事がありますが、簡潔に説明いたします。本殿にて祭典斎行後、境内にて神職が桃の弓にて天・地・中央を破魔の矢で射る。その後、射手複数名が計三十六本の矢を

放ち神事が終了となります。国家安泰・五穀豊穰・桃花祭神幸式の祓を行い翌日に備えます。

次に試楽祭でありますが、例祭神幸式の雅楽奉仕に支障がないことを祈る祭りとなります。三日当日ですが、本殿にて祭典を行います。奉仕神職は桃の枝を冠につけ、供える神饌の傍らには桃の小枝添え、華やかで厳かに斎行されます。その後には神幸式が行われます。神輿をはじめ、神職（乗馬）・甲冑武者、少年武者・稚児・短冊祭・歩射神事奉仕者等、総勢二百余名の行列を成し御旅所へ向かいます。近年はコロナ禍により神幸式は取りやめておりましたが、この令和四年は真清田神社御鎮座二六五〇年に当たる年となりますので規模を縮小し斎行されました。古くから続けられてきた神事が滞ると、神事を後世に伝えていく事が段々と難しくなってしまう。行列に奉仕して下さる団体の皆様も高齢化が進んできております。若手が入会しても今年は中止となれば教えることができません。本年はそれこそ御鎮座二六五〇年ですので斎行予定ではありましたが当日は雨が降りました。平時であれば中止となるところでしたが、当社宮司の一声により続行することとなりました。

雨にも関わらず多くの方々に神幸式を奉仕していただいたおかげで令和四年の桃花祭は滞りなく斎行されました。

ここまで長々と桃花祭の話をしてきましたが、一般の方々はやはり華やかな行列・パレードなどを楽しみにおられる事と思います。しかしながら桃花祭はそもそもお祓いが基となつたお祭りであります。神輿を中心として、桃の枝を携えた神職を初めとする行列が町を進んで行く様は桃によって除災・真清田の大神様による招福が一宮の町にもたらされていると私は考えます。その本質を参拝者の皆様へ上手に伝えられる様、日々精進していきたいと思ひます。

(愛知県 真清田神社 権禰宜)

日本人の心を取り戻しましょう！

―家に御神札を祀ろう　神宮大麻はかつてお祓い大麻とよばれた

塩　崎　昇

この夏の参議院選挙の遊説の最中、安倍元総理が兇弾に倒れ、落命されました。突然の訃報と、銃による凶行。志半ばで倒れられた元首相の死を悼んで、九月二十七日には国葬儀が執り行われます。この国葬の是非を巡る議論が、今、世の中を騒がせています。

手続きの問題等、様々な議論があることを承知していますが、国葬に反対する一部の国會議員が参列を拒否することを声高に発表したり、参列しようとする人を批判したりと事態はエスカレートしています。

国に貢献した人の死に直面し、時の政府が決定した弔いの方法に公然と反対し反対運動を煽動する。日本の歴史上あり得なかった出来事を私たちは目の当たりにしています。

誰であろうと、敵であろうと　人はひとりでは無い。その人を取り巻く家族や隣人が居る。そうした人たちの気持ちにも思いを致し手厚く葬る。このことは、日本人がもつ普遍

的価値であり、このことが出来ない人間は「人の道から外れた野蛮人」であると私は思います。

靖国神社の問題もしかり。他国が日本の首相の靖国神社参拝を公然と批判し、その批判が原因で、首相はおろか天皇陛下の御親拝までかなわなくなっている。この「野蛮」といえる言論を、マスコミは大宣伝し、公然としている。その結果が、この国葬反対の問題。一部とは言え、とうとう日本人までもが慰霊の場を荒らすことに良心の呵責を憶えなくなりましたと思うわけです。死との向き合い方がこれほどまでに乱れている。この日本人の道徳的な価値観を失わないために、私たち神職は何が出来るのでしょうか。

そのことを踏まえ、今日のテーマは、日本人の心を取り戻しましょう！ であります。

神宮大麻頒布百五十周年を記念しつつ、ますます減体してゆく神宮大麻頒布を憂い、かつての「お祓い大麻」に思いを致し、祓へ清めの祈りに立ち返ってみたいと思います。

伊勢神宮の御神札である神宮大麻は、かつて「お祓い大麻」と呼ばれ伊勢の御師と呼ばれる人たちによって日本中のほぼ全ての家々に配られていました。「お祓いさん」と呼ばれていたわけですから、お祓い大麻を家にまつることによって、家や家族が祓い清められ、禍から家中を護ってくれる。家には欠かせないものとして、氏神さまのお神札と共に大切

にされていました。そして、祓え清め。言葉で言い慣らされていますが、今を生きる人々が忘れてしまっていることの一つではないでしょうか。

お祓い大麻は私たちが唱えます大祓詞を一千回、一万回と唱えてつくられていました。

神宮大麻も、つくられるときから、私たちの手元に届くまで幾度ものお祓いの儀式が行われておりまして、昔ながらの伝統を受け継いでいます。お祓い大麻を頂いたなら、すぐさま家の神棚に、氏神さまのお神札等とともにおまつりし、毎朝、夕と手を合わせて拝みました。

（唱える） 祓へ給へ清め給へ 祓へ給へ清め給へ 祓へ給へ清め給へ

守り給へ幸へ給へ

このように、毎日神棚の前で手を合わせていますと、清らかである ということは何か？ということが だんだんわかってまいります。

まず、この祓え言葉をとなえているうちに、自分で気持ちを落ち着けようと意識します。無心になるということでしょうか。心がざわついているときには、なかなか無心にはなれません。いろいろな思いがめぐります。

自分の犯した過ちや、恥ずかしい失敗。心配事や願い事。しかし、だんだんと気持ちが

落ちつき　心が和らいでゆきます。そして無心になれたとき、

拝礼、(二拝　二拍手　一拝　を行う)

拍手を高らかに打ちましょう。この瞬間が、清められた瞬間ではないかと私は思います。

こうしたことを毎日のようにしていると、普段の暮らしでは、しょっちゅう心が乱れたり、怒ったり、動揺したりとの連続であることに気づかされます。そんなときにも、「赦え給へ　清め給へ」と心の中で唱える。人は誰でも、意地悪いこと、ずるいこと、怠けたことを考えて、行動したりしています。こうした良くない心や行動が　まさしく罪やケガレであり、そうしたことが積み重なり清らかな心を持ちつづけられなくなったときに、禍ごとがやってきます。禍は必ず起こります。そうしたことにならないように、無心になり、清らかな心と身体を取り戻す時間を　私たちは持たなければなりません。

日に一度の拝礼がかなわなくとも、週に一度でもかまいません。多ければ多い方が良い、つづけていると、不思議となにかに気づかされたり、ご縁を感じたりと、様々なことが起こります。神さまのお導きを感じますので是非やってみて下さい。

昔の人たちは、こうしたことを大切にしていました。普段、私たちを見守り、お導き頂

いている神恩に感謝し、この先もずっとつづいてゆく、季節のくり返しに、自分たちの暮らしぶりを重ねみて、平穩無事を祈っていたのです。

(唱える) 祓へ給へ清め給へ 祓へ給へ清め給へ 祓へ給へ清め給へ

守り給へ幸へ給へ

どうか皆さん、新年を迎えるにあたり、神宮大麻と神社のお神札を新しくお迎えして、毎日祈って下さい。そして、日本人の心を取り戻しましょう。

(和歌山県 伊勢部柿本神社 宮司)

新々数え年々の勧め

宮 田 修

時々、初宮参りでご祈祷を依頼されることがある。可愛らしい小さな命を中心に少し緊張した両親、満ち足りた表情の祖父母たちがご神前に並ぶ。幸せを絵にかいたような風景である。

しかし私は、ご祈祷が終わった後、常に複雑な心境に陥るのである。

昨年、令和三年に日本の国で生まれた赤ちゃんは、八十万人余りであった。実に少ない。団塊の世代である私が生まれた昭和二十二年は、二百七十万人が生まれている。実に三分の一以下になってしまっているのだ。これだけ赤ちゃんが減っているのに、これはあまり知られていないことだが、この国では毎日四百人位の小さな命が人工妊娠中絶で失われている。その数は、年間十四万人に上るといふ。この数は届け出があったものだけなので実際はもっと多いのではないかと言われている。生まれた赤ちゃんが八十万人、中絶される

赤ちゃんが十四万人、もはや初宮のご祈祷の後、あなたは中絶されずに生まれてきて良かったですね」と声をかけたくなるような状況なのである。

かつて日本人は、数え年を使っていた。その頃の日本人は、正月になると全員が一斉に年をとった。戦後間もない私の子どもの頃、かすかな記憶がある。正月の食卓である。親から「修は、いくつになったのだ。」と尋ねられた。その時すでに私は満年齢に慣れていたのか戸惑った覚えがある。小学校では、満年齢を教えられていたからだろう。

日本人が数え年を使っていたのは、もともと日本人にはゼロの概念がなかったからだと言われている。日本人にとって始まりはゼロではなく一であった。また日本人にとって年齢とはその人が持っている魂の数だともいわれている。従って生まれたばかりの赤ちゃんでも魂は持っており、一歳だったのだ。

「中絶の多さ」と「数え年」を考えてみた。中絶をする人は生まれる前の小さな命を一人の人と見ていない。産むか産まないかを決めるのは妊娠した女性の権利だと彼らは言う。私は、ではお腹の中の赤ちゃんには生まれる権利はないのですかと問いたい。すると人間としての権利が生じるのは誕生の後だと反論されてしまう。お腹の中の小さな命を認めない考えに私は到底納得することはできない。我々は法治国家にくらしている。すべて

にルールを作りそれに従うことを求められる。このことに異を唱えるつもりはまったくないが、そのルールを作ることができるのは当たり前のことだが現在生きている人たちである。亡くなった人、まだ生まれていない人、また国のルール作りでは未成年の人は参画することは許されない。生きている人だけがルールを作ることができるということは変えることはできないであろう。それならば生きている人たちは一生を終え、すでに亡くなってしまった人たち、これから生まれてくる人たちのことにもっと配慮すべきではないだろうか。まだ生まれていない人には人権がないのだから無視して良いというのはあまりに思い上がった考え方ではないか。同時に今は亡き我々の先人たちがどのような考えでいたのかについて十分に思いを巡らせるべきだろう。自分勝手に自らの思いのままに悪く言えば欲望のまにまに生きている人たちに都合の良いルールを決めることがあってはならないと私は考えているのだからだろうか。

日本人がかつて数え年を使っていたのは母親の胎内の命の始まりを起点にしていたわけではないが、生まれた時を一歳としていたのは結果的に母体の中の命を認めていたことになっている。そこで私は「新数え年」を提案したいのだ。さすがに日本人全員が正月に一斉に年をとるとするのは今や認めがたいだろう。そこで命の発生から凡そ一年で生まれて

くると考え、受精の瞬間をゼロ歳、誕生を一歳として以降、誕生日ごとに年を重ねる。こうすることによって母親の胎内に宿る小さな命に対する考え方も変わっていくのではないだろうか。

今から四十年ほど前、かのマザーテレサが日本を訪問した。彼女は講演の中で日本の国の美しさと豊かさを語った後、日本における妊娠中絶の多さを戒めた。この講演を聴いた若者たちが以来妊娠中絶を少しでも減らそうと運動を続けている。「生命尊重センター」というボランティア組織である。多くの方たちから資金を募り、出産をためらう女性たちを励まして支え、経済的な援助も続けている。そして運動が始まってからこれまでに九百人を超える赤ちゃんの出産に結びつけている。素晴らしい活動だと思う。

私はこの活動に十年近く前から加わっている。毎日毎日四百の小さな命が失われている今の状況を傍観することができなかったからである。全国各地に志を共にする多くのボランティアがいる。その人たちと共に運動を続けているのだ。

初宮のご祈祷で、心の底から「おめでとう」を申し上げ、無事の成長を祈念できる日がやってくることを心の底から願っているのである。

国造りは恋人から

河本文夫

先日、フィリップ・ジンバルドーというスタンフォード大学の米国人心理学者の「男子劣化社会」という本を読みました。ずっと前から日本でも草食系男子という言葉を聞きます。

そこには衝撃的なことが書かれておりました。それは、一九九六年、約二十五年前、未婚の若い男性で恋人いる男性五十パーセント、それが現在三十パーセントだそうです。三人に二人は恋人がいないのです。

今は誰もがスマホを持ち、彼女と自由に連絡できる時代にですよ。

なぜ恋人が出来ないのでしょうか。これアメリカでの話です。さて日本ではどうなのでしょうね。同じ傾向にあるのではないでしょうか。

私の青春は一九七〇年代ですから、その当時どうだったのでしょうか？恋人のいたパーセ

ントはいかがだったでしょうか。ぐっと高かったと思います。スマホもない時代です。

さて国の礎は家庭です。

古事記もスタートはイザナギ・イザナミの話ですよ。そして国造りが始まります。家庭を築くのは男女です。その家庭を築くきっかけはまず男女が恋人同士になることから始まります。さて恋人になるにはどうしたら？

神社庁の研修で古事記を学んだとき、イザナギ、イザナミの話。女性神イザナミから声を掛けたのでヒルコが生まれたとか、でも実際あの部分は何を我々に伝えようとしているのか？それが知りたい。

数年前、中堅神職研修を受けました。そして中央研修は神宮道場です。ノンキャリア神職の私にとっては初めての会場です。

「おー神宮道場での研修かー」

神典という本、持っていない人は購入することと指導がありました。

いやー素晴らしい、この本で勉強するのか、講師の先生はこのどこを話してくれるのかな？

ところが研修中一度もこの本を開く講義はありませんでした。私は少々残念な気持ちで

したが。

そこで、自分で開いてみるかということ。最初は古事記でした。過去になにかの研修で講師の方がニヤニヤしながら美斗能麻具波比みとのまぐあひの麻具波比の意味とはウンウンと話されたことを思い出しましてね、頁十四に記されておりました。

伊邪那美命が最初、伊邪那岐命に

「あなにやし えをとこを……」と言葉をかけ、麻具波比の結果、水蛭子が生まれとある。そこで今度は伊邪那岐命から声をかけることに……

まーしかし、こんな一言で、麻具波比に至れば誰も苦労はしません。

この場面、これは何を我々に伝えているか？この行間にあるものは何か？これが知りた
い。

私はこの部分、まずは男女の会話を大事にしなさいよと教えていると思うのです。言葉の機微を大事にと。

なぜそう思うのか、

私のような貧乏神主の息子はこんな田舎の神社、冗談じゃないと、工学系に進み宇部興産に勤めました。各セクションにそれぞれ若い女の子がたくさんいましたね。

そして、クリスマスの頃になりますと、連日ダンスパーティーがあります。会社の青年部もダンスパーティーを開くのです。社交ダンスです。いわゆるボールルームダンスですね。

会社の憧れの女の子。普通では手を握れなくても、この時は握れます。しかも向かい合って組めるんですよ。

胸がドキドキしますよね。そのため憧れの彼女と踊りたいのでダンスのシャドーステップの練習しました。いやーよく練習しました。ダンス教室にも行きました。

ジルバ、ブルース、マンボ、そしてルンバといえば、キューバンですね。

キューバンはいいよ、大好き、女性のセクシーさを極限まで引き出すダンスですね、一方ジルバは楽しい、究極はハマジルですね、ヨコハマジルバ。

おかげで私はジルバで二人の女の子を相手に踊れます。これがいいんだね、同じような背丈で、踊りのレベルが同じでしたら、楽しいよ。二人の女の子が同じような動きをするのです、スカートがひらっとまってフランス人形のようにです、コロンの香りが素敵だね。

いやー素敵ですよ。

ブルースでは、憧れの女の子組めるんですよ、惜別の歌の文句ではないですが、

「君が清けき目の色も、君紅の唇も、君が緑の黒髪も……」

そう……君紅の唇が、今この僕の目の前にあるのです。このシチュエーションであの当時、時代劇の必殺シリーズの暗闇土留人のテーマ、「旅愁」がかかります。

曲をスマホで流す

歌手は西崎みどりさん、「あなたをさがして　ここまで来たの……」なんて流れれば否応なしに、気分は高まります。

おっとー脱線しそうになった、なんの話だ、会話の訓練の話だ。

ブルースでは組みますから会話ができます。

その最たるもの、

神道講演では相応しくないのかもしれませんが、言わないとわからないので、

会社に胸の大きな素敵な子がいまして、その子と組むんです。きちんと組めば私の胸が彼女の胸に触れませんが、少しいたずら心で、姿勢を崩すと、わざと触れてしまうのです。

彼女が言います。

「いやーん、ここでそんな事しちゃー」

さー、あなただったらなんと答えますか？

「あ！ ごめんね」 って言いますか、

そうじゃないよね、

「ここであけないの」と返事します。すると

彼女もちよっと考え

……「どうかしら？」とか「かもね？」

おっとこの言葉を聞いたら、帰りにお茶でもと誘い二人だけになったらモミモミできるのかな？

「どこでもダメよ！」と言われれば、……私に気はないな、

これは非常にすれすれの会話です。

これも会話の訓練、言葉の練習、言葉の機微、其の結果うまく行けば恋人に、そして結婚。さて、古事記のイザナギ、イザナミの最初の会話。これは男女の会話、これを大事にしないさい、間違わないようにね、間違うとヒルコができるよ、これは愛を育む第一歩だからね、大事にしないさい。と教えていると思うのです。でも…これは私の勝手な解釈ですが、どうなんでしょうね。

でも今の世の中、デジタル社会で、SNSといった、一面便利ですが、男女の恋のその

細かな綾というものを育むにはやはりお互い向かい合いそこでの会話にまざるものはないように思うのです。

でも今、ダンスのようなレジャーがなくなつたこれも一因かもしれません。

さて、私の近くのコンビニに、高齢の女性とその息子であろう四十近い男性が、買い物に歩いているのをよく見かけるのです。その男性は、特に仕事を持っていないようで、いわゆる引きこもりの様子、可愛そうです。でもなぜ！

当然恋人がいるはずありません。其の上やるべき仕事もない、生きる意義を失い茫然自失で部屋に閉じ困っている。この引きこもり、男性が四分の三と多いのです。

なぜでしょう。その処方箋というか対策、解決策もいろいろ言われていますが、簡単ではありません。

なぜでしょう!!

縄文、弥生と長き時の流れの中で、村、部族を守るため男たちは戦わねばならない、そして侍が生まれる。この侍はお互いに、殺し合うという殺人が仕事であつた。それは命を賭けた戦いであるのですが、これは男の仕事。

もともと彼らは戦いのために鍛えられ、何度も合戦の中で強いものが生き残つた、ある

ときは主人に仕え、主人の代理として血の戦場を引き受ける。戦いの場で血を流す。その主人というのは公家であつたりしたわけですね、源氏と平家なんかそうでしょう。

男は戦うのを最高の喜びとして、喜びといえは語弊がるかもしれませんが、家族のため、群れ即ち、地域共同体のため、ひいては国のために戦うのは最高の誇りであり、それは愛であり、喜びに通じるのです。その魂は長い歴史何千年歴史の中でDNAに組み込まれてきたのではないか。そして時代は江戸になります。江戸時代は平和な時代です。戦争はない、一生のうち一度も刀を抜いたことがない武士がいたとか、平安な時代ですから、長い間DNAに組み込まれてきた男の誰かの為にという感激を味わうことがなく一生を終わる。

しかし、そのモヤモヤした心を支えたのが武士道という理念、それを心の支えとして男は生きてきた。その武士道は男の美学でもあつた。

幕末から日本が近代国として産声をあげると、今度は周辺国とのいざこざで、悲しいことに我が国は明治元年一八六八年以降大東亜戦争まで、十年に一回は戦争があつたと言つて良い。さて其の中で当時の男たちは生きてきた。そこで戦うのは男であり、当時子供の将来の夢は陸軍大将であつた。絶対的な憧れ、尊敬を受ける。そして戦後七十七年、男性

の心を奮い立たせる出来事もない。でも今でも男性の奥底にはその心が残ってます。

台風なんかで、田が被害を受ける。ちよつと見てくるといつて亡くなるのはおじいちゃんです。そのおじいちゃん立派！ おばあちゃんではありません。先祖代々の田を守る、村を守るといふ精神です。

昔は武士道で男は精神を鍛えた。男は武士道で精神を鍛えねばならないのが、どっこい今の世間は、子育てで赤ちゃんのオシメを変えなさい、いいですか、これって男にとつては苦痛だよ。男へのイジメじゃない。男も女も平等。男は強さを要求されない。それより優しさを男に要求し、強さを要求しなくなった頃から、なにか男が引き籠るようになった気がしませんか？

男の優しさってなんですか？

でも、私達の世代の人間はまだ救えた。男の片鱗をいろんなものに感じ其の中で自分の心にそれを落とし込むことが出来た。

これから紹介する映画も其の一つ、決して褒められた映画では無いけれど、高倉健主演、唐獅子牡丹、東映の作品です。

東急電鉄グループの五島慶太率いる、東京映画配給株式会社、いわゆる東映が送り出し

たシリーズものの任侠映画です。まさに若者が自分と高倉健さんを重ね、男になっていった。そんな気がします。

時は高度成長期、会社では工場建設があり、残業残業、まさに現場は戦場。

「あーっ疲れるな」

とため息もでる。心が折れそうになる。でも女は女で、日本古来にある女の心で、男の折れそうになる心を支える術すべを持っていた。

みなさん、ここの若い人はこの映画知らないだろうね。

わたしの微かに記憶にあるこの場面、掘り出してみました。

こんな場面です。

あの映画の流れは皆同じ。

悪い組と悪い組の争い。悪い組は無茶苦茶なことをやる。

そのいい組の親分に可愛がられるのが高倉健。

この高倉健には、兄弟盃を交わした義兄弟が悪い組にいます。これを演じるのが池部良。さて、いい組の親分が悪い組に殺される。カッチーンときた高倉健、とうとう悪い組に

殴り込みだ。

そこで、長屋にドスを取りに帰る、家には女房が待っている、この女房役が星由里子、松原智恵子だったか、若い人にはわかんない、綺麗だ。

ドスを持って出ようとする健さんに、その女房、声を掛ける、

「あんた、わかってるわ、いくのね、お腹にはあんたの赤ちゃんがいるのよ」

健さん、振り返り一瞬足が止まる、言葉を続ける。

「今度生まれてくる子が男の子だったら、あんたみたいな家業にはさせないよ」

ああ！女房にすまないと思いつつも、そして、また女房が声をかける

「もし生まれてくる子が女の子だったらあんたみたいな男にほれさせるわ」

あーこんな俺を女房は……その言葉を胸に……あるき始める。

客席から声が飛ぶ

「健さん！まってましたー」

そこに池部良が近づくと、今から殴り込みしようとする組の組員だ、お！喧嘩が始まる？

いや違う。池部良は、健さんと兄弟盃を交わした義兄弟。

池部良が言う、

「兄弟！あの組にはついて行けね、今しがた組のハッピーは返してきたぜ、その短いのじゃ

多くは殺せない！この長いのを使いな！ 加勢するぜ、」と長ドスを渡す。

男 高倉、池部あるき始める。二人の上に桜吹雪、そして曲が流れる、

「義理と人情を秤にかけりや、義理が重たい男の世界……」

かっこいいよ！

義理と人情に生きる男、その世界で生きるのに心が折れそうになる、

それを支える女房の愛

今どうでしょう、イクメン、オシメ替える男が優しい、男らしい？

いまこそ、武士道のような男の矜持が必要な時代ではないのでしょうか！

（山口県 宮尾八幡宮 宮司）

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

会 長	山 本 行 恭	椿大神社	宮司
副 会 長	戸 内 康 雅	心清水八幡神社	宮司
副 会 長	芦 原 高 穂	旭川神社	宮司
参 与	村 田 和 之	長束神社	宮司
参 与	落 合 偉 洲	久能山東照宮	名譽宮司
幹 事 長	山 下 裕 嗣	白山神社	宮司
幹 事	荒 木 眞 幸	月山神社	宮司
幹 事	生 寫 經 和	松尾大社	宮司
幹 事	小 野 日 隆	八坂社	宮司
幹 事	鍵 三 夫	志波彦神社鹽竈神社	宮司
幹 事	河 本 文 夫	宮尾八幡宮	宮司
幹 事	木 下 久 榮	大江八幡宮	宮司
幹 事・監査	佐々木美津子	天照御祖神社	宮司

幹 事	幹 事・監 査	幹 事	幹 事	幹 事	幹 事	幹 事	幹 事
事務 局長	事務 局長	事務 局長	事務 局長	事務 局長	事務 局長	事務 局長	事務 局長

鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子
鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子
鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子	鈴木 明子

立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社
立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社
立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社	立木神社

権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜
権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜
権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜	権禰宜

令和四年九月伊勢大会現在

神道講演全国大会のあゆみ

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一回 東京大会	昭和四六年八月四～六日	神社本庁		石沢 久英	久保田博人	
第二回 広島大会	昭和五〇年八月八～一〇日	塩屋神社		石沢 久英	河野 貞愛	
第三回 伊勢大会	昭和五四年八月二七～二九日	神宮会館		猪瀬 好一	山本 行隆	五十鈴川
第四回 九州大会	昭和五八年六月七～一〇日	太宰府天満宮		西高辻信貞	宇都宮正元	神国の春
第五回 みちのく大会	平成元年八月二～二三日	高山稲荷神社	工藤 伊豆	新山 昌孝	平澤 明穂	平成の民の祈り
第六回 伊勢大会	平成二年八月二〇～二二日	椿大神社	岡本 健治	山本 行隆	二橋 一彦	うまし国日本
第七回 東京大会	平成三年八月二七～二九日	全国神社会館	大野 俊康	山本 行隆	青島清三郎	食国の祈り
第八回 宮崎大会	平成四年八月二四～二六日	宮崎神宮	大宮 四郎	山本 行隆	本部 雅裕	
第九回 愛媛大会	平成五年七月一九～二一日	愛媛県護国神社	大宮 四郎	山本 行隆	小川 純生	天翔るみたま
第一〇回 東京大会	平成六年七月二～二三日	靖國神社	大宮 四郎	山本 行隆	坂 明夫	
第一一回 北海道大会	平成七年八月三～五日	鳥取神社	山本 行隆	鈴木 瑞彦	奥谷由起子	大禊
第一二回 広島大会	平成八年七月一六～一八日	三瀧荘	山本 行隆	村田 和之	村田 和弘	

	大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第三回	伊勢大会	平成九年七月一七～一九日	神宮会館	山本 行隆	矢野 憲一	中村 昌司	神路山
第一四回	京都大会	平成一〇年八月二七～二九日	八坂神社	真弓 常忠	佐古 一洌	嶋田 達久	追憶
第一五回	東京大会	平成一一年九月九～一一日	全国神社会館	宮西 惟道	村田 和之	生寫 經和	神国の教え
第一六回	愛媛大会	平成一二年八月二三～二五日	石鎚神社	十亀 興美	村田 和之	生寫 經和	伊予の雄叫
第一七回	石川大会	平成一三年九月四～六日	白山比咩神社	山崎 宗弘	村田 和之	生寫 經和	白嶺
第一八回	鹿児島大会	平成一四年八月二一～二三日	霧島神宮	高橋 弘平	村田 和之	生寫 經和	肇国の誓ひ
第一九回	愛知大会	平成一五年六月二五～二七日	熱田神宮	小串 和夫	村田 和之	生寫 經和	剣のこころ
第二〇回	鳥根大会	平成一六年七月一三～一五日	出雲大社	千家 尊祐	村田 和之	生寫 經和	国引の集い
第二一回	宮城大会	平成一七年八月二三～二五日	志波彦神社鹽竈神社	字仁 繁儀	村田 和之	生寫 經和	鹽竈ざくら
第二二回	北海道大会	平成一八年六月二二～二三日	士別神社	佐藤 公聰	村田 和之	生寫 經和	朔北のいぶき
第二三回	奈良大会	平成一九年六月一八～二〇日	石上神宮	森 正光	村田 和之	生寫 經和	布留の鼓動
第二四回	伊勢大会	平成二〇年六月一七～一九日	神宮会館	高城 治延	村田 和之	畠田 明彦	神風のむすび
第二五回	茨城大会	平成二一年六月二四～二六日	茨城県神社庁	塙 東男	村田 和之	畠田 明彦	常陸の祈り
第二六回	山口大会	平成二二年六月二二～二四日	松陰神社	上田 俊成	村田 和之	畠田 明彦	至誠のかがみ

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第二七回 沖縄大会	平成三年六月一二～一四日	波上宮	末安 大孝	村田 和之	畠田 明彦	魂の島から
第二八回 愛媛大会	平成四年八月二八～三〇日	石鎚神社	十亀 興美	佐古 一洌	畠田 明彦	愛比賣の睦び
第二九回 京都大会	平成五年六月一一～一三日	京都府神社庁	田中 恆清	佐古 一洌	畠田 明彦	平安の念ひ
第三〇回 石川大会	平成六年六月一一～一三日	白山比咩神社	村山 和臣	佐古 一洌	畠田 明彦	くくり
第三一回 伊勢大会	平成七年七月一三～一五日	椿大神社	石上 紀男	落合 偉洲	大竹 久雄	御みちびき
第三二回 東北大会	平成八年七月一九～二二日	盛岡八幡宮	藤原 隆磨	落合 偉洲	大竹 久雄	みちのくのいのり
第三三回 北海道大会	平成九年六月二〇～二二日	北海道神宮	落合 偉洲	山本 行恭	大竹 久雄	北鎮のおたけび
第三四回 関東大会	平成三〇年六月一九～二二日	鶴岡八幡宮	山本 行恭	戸内 康雅	大竹 久雄	鎌府の言霊
第三五回 九州大会	令和元年七月一六日～一八日	佐嘉神社	山本 行恭	戸内 康雅	芝 幸介	栄の国から 令和の祈り
第三六回 伊勢大会	令和四年九月二〇日～二二日	椿大神社	山本 行恭	戸内 康雅	芝 幸介	新時代のいぶき 伊勢国から

講話集 新時代のいぶき～伊勢国から～

—第三十六回 神道講演全国研修大会 伊勢大会—

発行 令和五年七月一日

編集者
装幀者
— 神道講演全国協議会事務局

印刷所 三重県いなべ市北勢町阿下喜二六七一一
製本所 共栄堂印刷株式会社

発行所 神道講演全国協議会

〒五九〇三五 三重県鈴鹿市山本町一八七一
TEL〇五九(三七二)一五二五(代)
FAX〇五九(三七二)一六六八
樺大神社社務所内

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします



